

# 九州大学 経済学部 同窓会報 第76号

九州大学経済学部同窓会  
 事務局 〒819-0395  
 福岡市西区元岡744  
 九州大学経済学部に  
 TEL 092-802-5561 FAX 092-802-5560  
 mail: dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp  
 郵便振替 01750-6-21743

## 目次

### 令和6年度行事予定(総会のご案内) / 1

- 研究院長就任のご挨拶 経済学研究院長 大西 俊郎 / 2
- 前研究院長退任のご挨拶 経済学研究院教授 大石 桂一 / 3
- 事務局長からのご挨拶 同窓会事務局長 大坪 稔 / 4

### 支部だより

- 東京支部 事務局長 大坪 勇二(昭和63年卒) / 5
- 関西支部 秋の見学会(令和5年11月11日実施)報告 理事 凌 雲翔(平成16年卒) / 6

### 福岡支部

- 八仙閣本店にて福岡支部忘年会を開催 ~令和5年12月12日(火) 事務局長 縄田 真澄(昭和62年卒) / 8
- 福岡支部交流ゴルフ会、第73回コンペを開催! ~令和5年12月3日(日)伊都ゴルフ倶楽部 鎌田 幸治(平成21年QBS卒) / 9

### 同窓生 健筆模様

- ストームの夕暮れ 黒澤 はゆま(平成15年卒) / 10
- 岡崎次郎著『マルクスに凭れて六十年:自嘲生涯記』(増補改訂新版)を読んで 奥田 勉(昭和30年卒) / 12

### つり特集

- 釣りと友情 九州大学名誉教授 西村 明 / 12
- 釣りの思い出 池田 毅 / 14

### リレー随想

- 大屋祐雪先生を偲ぶ会 柴田 康之(昭和38年卒) / 15
- 昭和48年入学生 学年古稀同窓会に参加して 坂梨(颯川) むつ美(昭和52年卒) / 17
- 逢坂先生の「卒寿」に寄せて 小林 真幸(昭和54年卒) / 18
- 人生の進路を変えた経済学との出会い 楠 雅之(昭和57年卒) / 19
- 1988年卒逢坂ゼミナール同窓会の開催 進 研一(昭和63年卒) / 21
- タイでの九州大学同窓会(ガオ会)との出会い 森田 俊一(平成3年卒) / 23
- 学びと成長の旅 王 佳(平成25年博士入) / 25

### 人物往来 ~退任

- 九州大学ビジネススクールの退任にあたって 村藤 功 / 27
- 21年間を振り返って 星野 裕志 / 28
- お別れのことば 内田 交謹 / 30

### 経済学部同窓会 創立50周年記念寄付金 / 31

### 同窓会歴代会長 / 32

### 同窓会からのご願い / 32

## 令和6年度行事予定(総会のご案内)

令和6年度の各支部総会を下記の通り予定しております。皆様、お誘い合わせの上、多数ご参集下さいますようご案内申し上げます。

### 令和6年度 関西支部総会

日時 令和6年5月18日(土) 15時~  
 場所 ハートンホテル北梅田 (大阪市北区豊崎3-12-10 TEL (06) 6377-0810)  
 <お問い合わせ先> 関西支部事務局 谷村 信彦  
 TEL (090) 6678-6754  
 E-mail nobuhikotanimura1@gmail.com

### 令和6年度 東京支部総会

日時 令和6年7月5日(金) 18時~  
 場所 学士会館 210号室 (東京都千代田区神田錦町3-28 TEL (03) 3292-5936)  
 <お問い合わせ先> 東京支部事務局 大坪 勇二  
 TEL (090) 1690-8989  
 E-mail otsubo@shigoto-pro.com

### 令和6年度 全国・福岡支部合同総会

日時 令和6年5月30日(木) 18時~  
 場所 八仙閣本店 (福岡市博多区博多駅東2-7-27 TEL (092) 411-8000)  
 <お問い合わせ先> 福岡支部事務局 国生、縄田  
 公益財団法人九州経済調査協会内  
 TEL (092) 721-4900  
 E-mail soumu-02@kerc.or.jp

### 令和6年度 広島地区九大法・経同窓会総会

日時 令和6年11月 開催予定  
 場所 未定

# 研究院長就任のご挨拶



経済学研究院長  
大西 俊郎氏

このたび、大石桂一前研究院長の後を引き継ぎ、2024年4月から2026年3月までの2年間、経済学研究院長（経済学部長、経済学府長）を務めることになりました。2010年4月に着任し、経済工学部門数理情報講座に所属しています。専門は数理統計学です。

2024年4月に発足した新しい部局執行部のメンバーは、大坪稔教授（副研究院長）、宮崎毅教授（経済工学部門長、経済工学専攻長、経済工学科長）、八木信一教授（国際経済経営部門長、経済システム専攻長、経済・経営学科長）、目代武史教授（産業マネジメント部門長、産業マネジメント専攻長）、與倉豊教授（産業・企業システム部門長）および大西の6名です。大坪教授と大西以外の4人は昨年度と同じです。新執行部一丸となって経済学研究院の発展に尽力していく所存です。

今年度は経済学部を含む人文社会科学系4学部にあたる九州帝国大学法文学部経済学科の創設から100年を迎えます。前々研究院長である岩田健治理事・副学長が中心となり「九州大学法文学部創立100周年記念プロジェクト」を立ち上げ、HPを開設いたしました（<https://houbun-100th.kyushu-u.ac.jp/>）。九州大学基金を通じて集められた寄附は、記念事業のほかに、学生の教育を支援するために活用させていただきます。同窓会の皆様におかれましては、次世代を担う後輩たちのためにご協力を賜りますようお願いいたします。

2019年末に始まったコロナ禍はウィズ・コロナのフェーズに入りました。昨年度以降は経済学部・学府においても大半の授業が対面式になっています。八木教授を中心として蓄積したノウハウを有効に活用し、天候不良時などにオンライン授業へのスイッチを機動的に行えるようになりました。教授会などの会議をオンライン開催することにより、業務効率化も図っています。

九州大学は2021年に文部科学省によって指定国立大学に選ばれました。世界最高水準の研究教育

活動が見込まれることを意味します。その際に策定されたのがKyushu University VISION 2030です（<https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/university/president/vision>）。経済学研究院もこのビジョンにしたがって研究教育を行っていきます。以下、教育・研究・社会共創に関するそれぞれのビジョンについて、経済学部・学府・研究院の取り組みをご紹介します。

教育に関するビジョンは「新たな社会をデザインする力と課題を解決する力を有し、グローバルに活躍できる価値創造人材を育成する」というものです。経済学部では2018年4月に「経済学部グローバル・ディプロマ・プログラム（通称GProE）」をスタートさせました。2年次進級時に定員10名で学生を選抜し、海外短期語学研修・長期交換留学・外国語での卒業論文などを課しています。コロナ禍の酷い時期には留学ができない、または、非常に難しいなど困難な状況でしたが、学生は粘り強く対応しました。これまで1期生6名、2期生6名、3期生7名が修了しています。

GProEと同じく2018年4月にスタートした「文系4学部副専攻プログラム」は、2023度から工学部建築学科が新たに参画し、名称も「人社系副専攻プログラム」に変更されました。学生がそれぞれの学部で専門科目を深く学びつつ、他学部の授業を副専攻として体系的に学ぶことで、複合的な知を有する人材の育成を目的としています。

経済学府では、中国人民大学との「ダブルディグリー・プログラム」に加え、英語による授業・論文指導で学位を取得する「公共経済学（IPPE）」、「金融・企業経済学（IPFBE）」、「経営・会計学（IPMA）」の3つの国際プログラムが設置され、世界各地から集まった優秀な大学院生にグローバル・スタンダードな教育を提供しています。

数学力・統計力を基盤にした博士人材を育成する5年間の修士博士一貫プログラム「マス・フォア・イノベーション卓越大学院プログラム」は2021年度にスタートし、2022年度、「マス・フォア・イノベーション連係学府」に改組されました。経済学府経済工学専攻は、数理学府およびシステム情報科学府と連携・協力し、その運営にあたっています。

社会人教育では、産業マネジメント専攻（QBS）、

芸術工学府および九州大学ロバート・ファン／アントレプレナーシップ・センターの3者が連携して教育を行う「デザイン×ビジネス×アントレプレナーシップ専修トラック（通称DBEX）」が2022年度に始動しました。MBA（経営学修士）が包含する経営マネジメント能力を有し、デザインの力を駆使しながら事業機会を発見し、新たな価値創造に挑戦するアントレプレナーシップ溢れる人材を育成しています。

「科学技術イノベーション政策教育研究センター（通称CSTIPS）」は、経済・社会における課題を多面的な視点から分析し、その解決に必要な政策をエビデンスに基づいて立案・実行できる人材の育成を目指す「科学技術イノベーション政策人材育成プログラム」を実施しています。産業マネジメント部門の永田晃也教授がセンター長を務めており、経済学府は2022年度から責任部局となりました。

研究に関するビジョンは「学術基盤研究から社会変革に貢献する展開研究まで広く研究力を強化し、国際競争力を高めるとともに社会的課題の解決に貢献する」です。経済学研究院には加河茂美主幹教授、2021年度に科学技術分野の文部科学大臣表彰「若手

科学者賞」を受賞した藤井秀道教授をはじめとして世界をリードする研究者が在籍しています。部局特別予算などを拡充し、国際的に評価される研究および社会にインパクトを与える研究の遂行を支援したいと考えています。

人文・人間環境・経済・法の各領域の専門分野を生かしつつ、領域内だけでは成しえない学際的な研究をおこなっていく協働研究委員会として2019年に人社系協働研究コモンズが設置されました。経済学研究院は、他の3部局と協働し、経済学の枠内にとどまらない学際的な研究も推進いたします。これは、社会共創に関するビジョン「知の拠点として地域社会やグローバル社会と共生・共創し、研究教育活動を通じて社会の持続可能な発展と人々のウェルビーイングの向上に貢献する」を実践するものです。

世界の有力大学と伍して戦えるようになることを目指し、九州大学は石橋達朗総長のもと今後も大学改革を進めていきます。経済学研究院もその重要な一翼を担っていく所存です。改めまして同窓会の皆様のご支援・ご協力を賜りますようお願いいたします。

## 前研究院長退任のご挨拶



経済学研究院教授

大石 桂一氏

2024年3月をもって経済学研究院長・学府長・学部長を退任いたしました。任期中の3年間、同窓会の皆様には多大なるご支援を頂きましたことに厚く御礼申し上げます。

岩田健治研究院長の後を受けて、2021年4月に研究院長に就任したときは、まさにコロナ禍の真っ只中でした。感染拡大がいったん収まったかと思えば、また次の波がやってくるというサイクルの繰り返しで、対応には大変苦慮しましたが、経済学研究では他部局に先駆けてオンライン化特設チームを設置していたこともあり、オンライン授業と対面授業のベスト・ミックスによって、質の高い教育を提供し続け、学生からも高い評価を得ることができました。

これもひとえに教職員が一丸となって難局に立ち向かった結果であり、この時期に研究院長であった者として本当に誇らしく思います。

「経済学部グローバル・ディプロマ・プログラム（GProE）」も、コロナに翻弄されました。2018年度に始動したこのプログラムは、2年次進級時に選抜を行い、短期語学留学・長期交換留学・外国語での卒業論文などを課すことでグローバル人材の育成を目指すものですが、第1期生と第2期生が3・4年次の必修である長期交換留学に赴く時期がコロナ禍と重なったのです。世界的なパンデミックの中にあって文部科学省は学生の海外留学を認めていませんでしたが、ようやく2021年6月になって大学間交流協定等に基づく派遣が解禁されました。それでもなお、九州大学本部は依然として学生の海外派遣に慎重な姿勢を崩しませんでした。そこで、経済学部では、確固たる信念と覚悟をもち、リスクを十分に認識したうえでそれに備え、自覚ある大人として行動できる学生については、経済学部長としてそのこ



とを確認したうえで責任をもって海外留学に送り出すことを決定し、大学本部と厳しい交渉を重ねた結果、2021年度には5名のGProE生を留学させることができました。こうして何とか無事に第1期生を修了させることができたのです。以降、第2期生・第3期生と順調に修了者を輩出し、現在まで計18名がディプロマを手にして世界へと羽ばたいて行きました。

GProEのほかにも、ここ数年取り組んできた数々の新しい教育上の試みも軌道に乗りました。学部における「人社系副専攻プログラム」、大学院経済学府経済工学専攻が数理学府およびシステム情報科学府とともに運営する「マス・フォア・イノベーション関係学府」、産業マネジメント専攻（九州大学ビジネス・スクール：QBS）が芸術工学府および九州大学ロバート・ファン／アントレプレナーシップ・センター（QREC）と連携して教育を行う「デザイン×ビジネス×アントレプレナーシップ専修トラック（DBEX）」、さらには経済学府が責任部局として実施する「科学技術イノベーション（STI）政策人材育成プログラム」は、いずれも着実に成果を残し

ており、今後ますますの展開が期待できます。

私は一人の教員に戻り、新しく研究院長に就任された大西俊郎教授のもと、副研究院長の大坪稔教授をはじめとする新執行部の先生方とともに、経済学研究院・学府・学部のさらなる発展に努めてまいりますので、同窓会の皆様におかれましては、今後いっそうのご支援をたまわりますよう、お願い申し上げます。

最後に、今号の同窓会報にもお願いの文書を同封させていただきましたが、九州帝国大学法文学部経済学科の創設から100年を迎える本年、人社系4部局協働で法文学部創立100周年記念事業を実施いたします。私も引き続き実施委員長として本事業にかかわってまいります。法文学部100周年記念プロジェクトのHPも立ち上げましたので、ご覧いただき、本事業の成功に向けてご協力いただければ幸いに存じます。

では、3年間、本当にありがとうございました。

【法文学部100周年記念プロジェクトHP】

<https://houbun-100th.kyushu-u.ac.jp/>



## 令和6(2024)年度入学式 新入生309名 令和5(2023)年度卒業式 卒業生317名



同窓会事務局長

大坪 稔氏

1995(平成7)年卒

1997(平成9)年博士入

令和6年4月3日(水)、伊都キャンパスの椎木講堂で令和6(2024)年度入学式が行われた後、14時から経済学部保護者説明会、5日(金)にはイーストゾーン大講義室Ⅱにて経済学部オリエンテーションが開催されました。社会人中心の産業マネジメント専攻(九大ビジネススクール、略称QBS)の入学式は、4月6日(土)に、伊都キャンパスD103教室で開催されました。入学者総数は309名で、内訳は経済学部経済・経営学科144名、経済工学科89名、大学院経済学府修士学生が経済工学および経済システム専攻34名、産業マネジメント専攻42名です。経済学部保護者説明会では、道永幸典同窓会長にお越しいただき、同窓会の説明と入会案内を行っていただきました。



卒業記念祝賀会を盛り上げてくれた藤井ゼミ学生幹事の皆さん

3月25日(月)に、経済学部卒業生の卒業記念祝賀会を開催いたしました。伊都キャンパスへ移転して以降、天神のホテルで開催していましたが、昨年は新型コロナウイルスの感染状況が予測しづらいため大学生協の食堂(ビッグスカイ)で開催しましたが、これが好評だったこともあり、本年も同じ場所で開催しました。

経済学部卒業生は233名で、うち経済・経営学科146名、経済工学科87名でした。経済学府修士課程

修了生は39名で、うち経済工学専攻15名、経済システム専攻24名、産業マネジメント専攻45名です。若手研究者への研究支援や学業優秀な学生への顕彰として贈られる「南信子」教育研究基金による「南信子」賞の授与が、以下の通り行われました。

#### 修士論文・プロジェクト論文

- |                |       |
|----------------|-------|
| (1) 経済工学専攻     | 須山 達彦 |
| (2) 経済システム専攻   | 月岡 葵  |
|                | 江口 修平 |
| (3) 産業マネジメント専攻 | 古見 直子 |
|                | 辻 尚伸  |

#### 成績優秀者

- |             |       |
|-------------|-------|
| (1) 経済・経営学科 | 永田 茉優 |
|             | 永田 あい |
| (2) 経済工学科   | 辻川 崇史 |

昨年度は、新型コロナウイルスの影響を気にしながらも、各支部の皆様方をはじめ大勢の方々のご協力を仰ぎ、

一年間の活動と行事を終えることができました。関係する皆様方には心よりお礼申し上げます。

なお本年3月を以て14年の長きにわたり同窓会を陰ながら支えていただいた本部事務局の藤原さんが退職されました。心より感謝申し上げます。4月からは後任として原口千春さんが勤められます。皆さまには引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

現在、当同窓会では、財政問題の解決と2025年の50周年記念事業に向けて同窓会への寄付金を募っています。ぜひとも、ご協力をお願いいたします。また、今後も道永会長を先頭に、同窓会活動のさらなる充実・発展を図ってまいりますので、各支部同窓会役員の方々ならびに同窓生の皆様方へ一層のご協力をお願い申し上げ、新年度のあいさつとさせていただきます。

# 支部だより

## 東京支部

### 1. 2023年後半の活動

昨年後半の活動は「とにかく楽しかった！」に尽きますね！コロナ後、本格的に同窓会活動が復活し、また「同窓会のデジタル化・オンライン化」で改革も進みました。事務局長として大いにやり甲斐のあった半年でした！

### 2. 同窓会活動の新たな気づき

振り返って最も特筆すべきは、東京支部総会の開催です。「支部の顔」的なイベントですから、負けるわけにはいきません。全力で集客に注力し、来賓15名、参加者70名の合計85名での開催でした。2022年の参加実績が、来賓14名、参加者67名の合計81名でしたので、対前年比5%増。満足はしていませんが、まずまずの結果ではありました。

今年の記念講演は、道永幸典先輩（1981年卒。西部ガスホールディングス代表取締役社長）、テーマは「九州四方山話」。サービス精神旺盛な道永先輩のおかげで、大いに盛り上がりました。伊東信一郎

支部長（昭和49年卒。ANAホールディング前会長）のご挨拶など、内容・変化を感じさせるニュース性も充実しており、二次会も席が足りなくなるほどの盛況で、大変やりがいを感じられた総会となりました。

しかし募集活動は決して楽ではありませんでした。ここでの私の気づきは、同窓会活動を集客マーケティングと位置付けて、計画と行動に時間を割くことを、本業の仕事並みに「覚悟」して取り組むことです。覚悟というと大袈裟ですが、要は「片手間」意識を捨て去ることだと思います。

なお、今後の活動ですが、3月の卒業祝賀会には、開催告知のため、竹之下理事、神路祇（こうろぎ）理事と私、大坪（勇）事務局長を派遣することがこの時点で決定しています。大いに情報宣伝活動に務めてまいります。

また、新卒歓迎会については、例年通り4月中旬の土曜日に有楽町の東京オフィスとオンライン併用で開催することとし、若手理事を中心に、企画・運営を行う予定です。





これらを、東京支部を成長させていく集客マーケティング活動の重要な機会と位置づけ、しっかりと時間を投入して取り組みたいと思います。

### 3. 事務局活動は新たな局面へ

「コロナ後」進んだオンライン化により、同窓会事務局としての活動がかなり変化してきました。そのプラス面に目を向けようと思います。



まずは、事務局としての活動の効率化、作業の省力化です。事務局活動に貢献してくれる主力メンバーは、実社会でも多忙な毎日を送っています。その上、経済学部だけでなく、東京同窓会Summer Festaのスタッフも兼ねているメンバーがほとんどです。そんな彼女らの負荷を下げ、同時にパフォーマンスを上げる手段としてデジタル化を進めてきました。例えば今回、こんな試みをしました。例年であれば、支部総会の1週間前の週末にリアルに会場に集まり、資料や名札の準備などをしてきました。昨年はそれを思い切って廃止しました。資料はGoogle上で共有し、印刷以外は全てリモートの共同作業で完結、また名札の事前印刷は廃止し、当日、自分で記入いただき服に貼り付ける「シール方式」(海外などでよく見かけますよね)にしました。これによって、リアルな準備作業を省力化できました。とはいえ、名札の廃止はそのイベントの印象を左右しますので、参加メンバーからどんな反応が返ってくるかドキドキしましたが、まずは肯定的に捉えていただいたようでホッとしました。

また、従来は会員とのやりとりは、郵送はがきやFaxなどアナログが中心でありましたが、一気にオンライン化を進めました。

今後も、特に業務が集中しがちな若手理事の



まずは、事務局としての活動の効率化、作業の省力化です。事務局活動に貢献してくれる主力メンバーは、実社会でも多忙な毎日を送っています。その上、経済学部だけでなく、東京同窓会Summer Festaのスタッフ

負荷を軽減し、コミュニティへの帰属意識や集団への貢献の喜びといったプラス面をより多く味わっていただき、より満足度の高い「第3のコミュニティ」としての充実した同窓会活動を実現していきたいと思います。

【東京支部事務局長 大坪 勇二 (昭和63年卒)】

## 関西支部

### 秋の見学会(令和5年11月11日実施)報告

関西支部では、2025年日本国際博覧会(大阪・関西万博)の開幕に向けて機運を盛り上げようと、万博をテーマとする秋の見学会を考えていました。開催予定地の夢洲はまだ工事中のため、1970年大阪万博の跡地である万博記念公園に着目しました。そして、万博記念公園の指定管理者である「万博記念公園マネジメント・パートナーズ」(BMP)のご協力のもと、大阪万博のレガシーを学ぶ特別な見学ツアーを実施できました。

午前9時30分に総勢15名が大阪モノレール万博記念公園駅に集まり、普段利用する機会の少ないモノ



太陽の塔前 集合写真

レールにちょっと不慣れのせいか、予定時刻より15分ほど遅れて万博記念公園中央口へ出発しました。

万博記念公園中央口建物の前の広場では、BMP広報担当の石村様が今回の見学概要を説明してくれました。今回は2018年から50年ぶりに内部公開をした太陽の塔の内部見学と1970年に開催された日本の高度経済成長期の象徴である70年大阪万博当時の鉄鋼館を利用したEXPO'70パビリオンを見学しながら、当時の万博レガシーについて万博マニアのガイドで公園内を案内してくれました。

50年前の万博レガシーが見られる！！皆さんがわくわくしながら、太陽の塔の前に笑顔で集合写真を撮りました。

ガイドさんに案内され、最初の見学先であるEXPO'70パビリオンに着きました。EXPO'70パビリオンは、大阪万博当時の出展施設であった鉄鋼館を利用し、同万博の記念館として、平成22年3月にオープンしました。スペースシアターと呼ばれたホールや、大阪万博の会場を300分の1のスケールで再現したペーパークラフトなど、貴重な資料等を展示しています。しかし、今回見学の目玉は、2023年8月に新規オープンした別館です！当時、太陽の塔の頂部に設置されていた未来を象徴する「黄金の顔」の展示や、当時のにぎわいや熱気などが伝わる「EXPO'70体感ギャラリー」を設置しています。そのほか、大阪万博を彩った「ホステス」のユニフォームなど、当時の様子を体感できる数多くの資料や作品も展示しています。

見るものが多すぎて疲れるのではないと思われるかもしれませんが、今回のガイドの金田さんのおか



げで、そんなことはない！金田さんの笑顔と明るい態度は、見学会に楽しい雰囲気をもたらしました。彼女は地元吹田市出身で、なんとお母さんが大阪万博開催時に「ホステス」として活躍していました！そして、母から娘へ、主婦業をこなしながら万博レガシーガイドを務めています。彼女の説明は、軽快なジョークや興味深いエピソードを交え、私たちを引き込んでいました。

EXPO'70パビリオンの見学は1時間強で、あっという間に終わりました。次に案内されたのは、万博のシンボルである太陽の塔でした。皆さんご存じのとおり、太陽の塔は、芸術家の岡本太郎がデザインし、1970年に開催された日本万国博覧会のシンボルゾーンにテーマ館の一部としてつくられました。塔の頂部には金色に輝き未来を象徴する「黄金の顔」、現在を象徴する正面の「太陽の顔」、過去を象徴する背面の「黒い太陽」という3つの顔を持っています。

内部には原生物から人類に至るまでの生命の進化の過程を表現した「生命の樹」(高さ約41メートル)があり、博覧会以降非公開だったものを復元・再生し、2018年3月より公開しています。「太陽の塔」は過去・現在・未来を貫いて生成する万物のエネルギーの象徴で、50年以上経った現代でもその輝きを放っており、私たちに感動



生命の樹



と感銘を与えてくれました。

太陽の塔を出たちょうど正午過ぎ、ガイドの金田さんと惜別してから、昼食場所へ向かいま



B-BASE

した。B-BASEは、万博記念公園が指定管理者制度を導入してから出来た大人気なバーベキュー場です。関西同窓会の皆さんは、公園のやさしい緑に囲まれて、アウトドアを楽しむひとときを過ごしました。

昼食後は自由行動となり、公園内で解散しました。今回の万博記念公園レガシー体験ツアーを振り返ってみると、1970年大阪万博から50年も経ちましたが、「人類の進歩と調和」との理念は、今の人々の生活でも息づいていて、そのレガシー効果が大きく残っています。鉄道などのインフラはさておき、その跡地が公園、博物館、アウトドア、イベント会場などとなり、時代の変化と共に、進化していく姿に魅了されました。そして、2025年には、万国博覧会がもう一度日本・大阪にやってきます。今度の万博はどんな未来を見せてくれるのか、期待するとともに、50年前の大阪万博と同様に、その理念や跡地をどう生かすかも、とても大事だと思います。

【関西支部理事 凌 雲翔（平成16年卒）】



関西支部 理事会 2024.3.14  
左より 小森田支部長、中野副支部長、太田副支部長、佐藤理事、清丸事務局長代理、谷村事務局長、凌理事

LINEの友達追加でQRコードを読み取ると、関西支部のLINEオープンチャットに参加できます。

定時総会（2024年は5月18日開催）、秋の見学会、若手会、ゴルフ会（毎年3月、9月に開催）などのイベントの連絡もここで発信します。

関西エリアに勤務・進学予定の方はぜひ登録してください！



## 福岡支部

### 八仙閣本店にて福岡支部忘年会を開催

～令和5年12月12日（火）

令和5年12月12日（火）、令和5年度九州大学経済学部同窓会福岡支部忘年会が八仙閣本店にて開催されました。コロナ禍の影響で令和2年は中止、令和3年、4年は規模を縮小して開催と制約を受けてきましたが、令和5年は通常通りの開催となり、92名が参加する大規模な宴となりました。

参加された皆様を少し紹介しますと、九州大学からは岩田理事・副学長、大石経済学府長・経済学研究院院長（平成2年卒）、潮崎准教授（平成9年博士入）、小室准教授、そして本部事務局からは大坪事務局長（平成7年卒）と藤原様にご参加頂きました。また、昭和30年卒の牛房様（志免町議会議員）から、令和3年卒の中川様（西部ガスホールディングス）まで、幅広い年齢の同窓生が集まりました。因みに、卒業年次では平成2年卒が6名で最多の参加数でした。忘年会の開会にあたり、橋本福岡支部長（昭和59年卒）より開会挨拶が行われ、参加頂いた同窓生・大学関係者等へお礼を述べるとともに、福岡支部の総会・忘年会の運営の見直しを予定している等、今後の抱負を語られました。

続いて、大石研究院長より、九州大学や経済学部の状況等について紹介され、乾杯の発声をして頂きました。

その後、しばらく懇談がつづいた後、恒例の「大抽選会」が行われました。大抽選会は、同窓生のご厚意により提供頂いた賞品の当選者を抽選で決めるアトラクションです。賞品を提供頂いた同窓生の所属する会社・組織は以下のとおりです。

- ・九州大学
- ・九州電力
- ・如水庵
- ・西部ガスホールディングス
- ・西日本鉄道
- ・西日本フィナンシャルホールディングス
- ・博多座
- ・八仙閣
- ・ふくおかフィナンシャルグループ
- ・経済学部同窓会福岡支部

また、貫前同窓会長（昭和43年卒）の計らいで、福岡市内で開催予定のコンサート「HOLLYWOOD



in JAPAN 2024」が紹介された後、チケットを賞品として提供頂きました。

複数名分の賞品を用意して頂いた企業も多く、とりわけ如水庵の森会長（昭和45年卒）からは10名分の菓子折りを提供頂きました。多数の当選者が出たこともあり、大抽選会は大いに盛り上がりました。



大抽選会の後、しばらく懇談の時間となりました。お酒も進み、会場のあちこちを移動して挨拶する方、輪になって語り笑い合う方、旧交を温める方など、会場は談笑の渦に包まれました。その後、これも毎年恒例のビンゴゲームが行われ、“ビンゴ”の早い順に、約半数が当選者となって賞品を受け取られました。

そして開宴後約2時間が経過し、宴も終盤となり、皆で九州大学応援歌・学生歌「松原に」を熱唱。最後に、道永同窓会長（昭和56年卒）が閉会の挨拶と博多手一本を入れられ、同窓会はお開きとなりました。

最後になりますが、今年も西部ガスホールディングスの末次様（平成2年卒）に司会を務めて頂きました。今後、総会と忘年会の運営見直しが予定されており、毎年忘年会を盛り上げて頂いた末次様の名司会ぶりは今回で見納めとなりそうです。長年にわたり大変有り難うございます。また、西部ガスホールディングスや八仙閣本店の皆様には準備段階からご協力を頂きました。そして、九州大学同窓会連合会からは、九州大学の広報誌や九州大学のロゴマークの入った紙袋、酒類をご提供頂き、多くの企業・団体から賞品をご提供頂きました。

本紙面をお借りして、お世話になった全ての皆様へ厚く御礼申し上げます。そして、令和6年の忘年会にも、多くの同窓生が参加されることを期待しています。

【福岡支部事務局長 縄田 真澄（昭和62年卒）】

## 福岡支部交流ゴルフ会、第73回コンペを開催！ ～令和5年12月3日（日）伊都ゴルフ倶楽部

三洋ビル管理株式会社

鎌田幸治氏

2009(平成21)年QBS卒

令和5年12月3日（日）に九州大学経済学部同窓

会福岡支部第73回交流ゴルフ会が、伊都ゴルフクラブにて、62名の参加者のもと開催されました。

表彰式では、橋本福岡支部長から、年1～2回開催として40年近く開催されていること、以前は2～3組の参加でしたが、貫前同窓会長の「ゴルフを通じて同窓会を活発に」との掛け声のもと輪が広がり、50歳も離れた同窓生の交流の場となりつつある旨のお話がありました。また今後、行事にも変化を持たせ、さらに明るく発展させていきたいとの抱負も述べられました。

その後、参加者全員の自己紹介と近況報告がなされ、最後にわざわざ表彰式にだけ駆けつけて頂いた道永同窓会長が、リクエストに応え（自ら用意されていたようですが…）歌舞伎仕込みの口上を述べられ大いに盛り上がりました。

景品も多くの協賛があり、幹事の方々が、一つ一つ紹介をされながら渡されるのが印象的でした。準備が大変だったと思います。

道永先輩がいらっしゃらない中でのベスグロ優勝でしたが、同伴の飛ばし屋の西部ガスの山崎さん（H02卒）、別府から駆けつけ毎度幹事をして頂いている九電の堀さん（H07卒）、初参加で還暦過ぎてゴルフを始めた鍼灸師！の河内さん（S59卒）らと、同窓会らしい和やかな雰囲気の中、伸び伸びとラウンドができ、久しぶりに79の好スコアが出ました。

特に、引きずっていた脚を前日に治療してくれ、身体もゴルフもよくなる鍼灸師の河内さんに感謝です。

司会の九電の三上さん（H09卒）から、ニアピン含めてほったくりとの紹介がありましたが、今後も活躍できるように精進したいと思っています。

ゴルフをきっかけとした交流が益々盛んとなることを祈念しつつ、交流ゴルフ会の報告とさせていただきます。

# 同窓生 健筆模様

## ストームの夕暮れ

黒澤 はゆま氏  
2003(平成15)年卒

戦前の旧制高等学校には、ストームという風習があったという。日本大百科全書(ニッポニカ)にはこう書かれている。

「元来は英語の嵐や暴風雨、転じて、旧制高等学校の寮などで行われたしごきのな行事をさす。……学校の寮などで、上級生が新生人や下級生に殴り込みをかけ、嵐のように暴れ回ることもいう。これは、新生人や下級生をいじめる目的ではなく、しごきをかけ、それ以後の相互親睦と一体感をつくりあげるもの。また、新生人や下級生にとっては、しごきを受けて少年的残存を切り捨て大人として成長するのを助けるものとされた」

ウィキペディア(2024年2月12日閲覧)には様々な実例とともに、「新学制への変化、寄宿舎の減少、男女共学により男子生徒の文化であるバンカラの衰退などにより旧制高校以来のストームは一部を除き消え去ってしまった」とある。

しかし、私が在学していたころの九州大学には確かにこのストームの伝統が息づいていた。

1999年春といえばもう25年前のことである。

私は夢と希望に胸膨らませた新生人で、新生活の待つ田島寮へ足取りも軽やかに向かっていた。ところが、樋井川にかかる橋を渡ろうとしたとき、奇妙な声が聞こえてくることに気づいた。

悲鳴。しかも野太い男たちの声。それは、重なり合いながら地鳴りのように響いてくる。どうもそれは、行く手、自分が今から入寮する田島寮から聞こえて来るようだった。

(何かの間違いだろう)

そう願ったが、寮に近づけば近づくほど声は大きくなる。そして、門をくぐるととんでもない光景が目に見え込んで来た。

恐怖に青ざめた新生生達を前に、長ランの学生服を着て、アイパーをあてた強面の先輩達が竹刀をつき仁王立ちしている。

「我々はお前達新生生が先輩方の前で粗相をしないよう、寮長から教育係を仰せつかった者だ。さあ、

自己紹介の練習！」

強面の先輩が号令を出すと、順々に新生生が声を張り上げる。

「九州大学〇〇学部〇〇学科、田島寮〇棟〇〇〇号室〇〇です！！」

悲鳴と思ったのはこの新生生たちの絶叫だった。

部屋に荷物を置くと、私も早速、練習に参加させられた。確か半日くらい続いたと思う。こちらとしては精一杯大声出し、まつげが当たりそうなほど教育係も顔を近づけているのだが、なかなか認めてもらえない。

「聞こえない！！」

と何度言われただろうか。ようやく「よし！」が出たときには、声はガラガラのハスキーボイスになっていた。

自己紹介が出来るようになった新生生は順々に、寮長の部屋に連れていかれる。窓は黒いビニールで目張りされ真っ暗、その奥に丸いサングラスにひげ面の寮長が座っている。

寮長は私の自己紹介を聞いた後こう言った。

「困ったことがあったら何でも言え」

(今が人生で一番困ってるんだけどな)

と思ったが何も言えなかった。

その後「寮の先輩達にも顔を覚えてもらえよ」ということで、A棟1階、B棟2階とブロック毎に設けられた談話室を訪ねて回られる。室内でとぐろを巻いている先輩達の前で、例の自己紹介と一発芸をやり、先輩に面白いと認めてもらったら、判子と呼ばれるサインを紙に書いてもらう仕組みだった。判子を50個集めないと懲罰委員会である。

懲罰委員会については、先輩達が声を潜めて「あれは本当にヤバいぞ」というので、我々は判子欲しさに必死で寮中を駆けずり回った。

しかし、自分としては最高の出来の「ジャクソンファイブの物まね」だったが、14個しか集まらない。どんなに頑張っても50個集められないように先輩たちも加減するのだ。

ただ、同じブロックで両津勘吉みたいな濃い顔をしたC君は、見た感じがもう面白い上、「タカアシガニの独り言」という特異な芸で64個をかっさらい、寮始まって以来の天才と評判になった。

この歓迎式なのか何だか分からない行事は、新入

寮生が入寮し出す入学式の3日前から、入学式の前夜までずっと続く。通り過ぎりの先輩達が気まぐれに自己紹介を命じたりもするので、最後の晩ともなると自我も精神も喉もすり切れ、皆一言もない。

そんなズタボロの我々にとどめの寮内放送が流れた。

「寮則違反を犯した新生生がいる。大部屋に集まれ！」

寮則は「先輩の許可なき飲酒を禁じる。先輩の許可なき外出を禁じる。先輩の許可なき麻雀を禁じる。先輩の許可なき不純異性交遊を禁じる」という四則だった。

元食堂とかいう、大部屋の周りを先輩たちが渦になって取り巻いている。

「寮則違反ってなんじゃ。今年の新生生はどうなるとる？ 前代未聞の粗相やぞ」

怒号に包まれるなか、新生生はブロック毎に並ばされた。

「全員目をつぶれ。今から寮則を破った者だけ前に引きずり出す」

言われた通りにすると、確かに列から誰かが引きずり出された気配がする。

「よーし、目を開けろ」

怖々目を開くと、あれだけ怖かった教育係、寮長が土下座している。

「すみません。全部嘘でした」

実はこの行事はウソコンとあって、新生生をだまからかす壮大なドッキリだった。

寮長は単に「顔が怖いから」ということで選ばれた偽物だし、寮則も嘘、懲罰委員会も存在しない。引きずり出されたのはドッキリがばれないよう、新生生の間に交じってスパイ活動を働いていた偽一年生だった。

今からでも警察に通報したいくらいだが、この時は安堵と喜び、そして自分たちのために、これだけ大きなイベントを用意してくれた先輩達への感謝の気持ちで、皆うれし泣きした。私も泣いた。その横でC君も泣いていたが、こちらは渾身の芸で獲得した六十四個の判子に、何の意味もなかったことに対する悔し涙であった。

ちなみにこの年はあまりに声出しさせられたため、肺に穴が開いた新生生が出た。さすがに問題視され某地方紙で記事になったが、残念ながらタイトルは「ひ弱になった現代青年」だった。

ストームのノリはその後も続いた。ネタばらし後の宴会は、もはや諸般の事情で詳しく言えない。と

にかく実に実にひどいものだった。他にもパンツ行進、田島ワールドカップ、田島エフワン、田島かくれんぼ等々の行事があったが、紙幅もないし、ひとつ書くごとにIQが五ずつ減っていきそうな気がするので割愛する。

今の感覚だと、人権侵害かコンプライアンス違反の思い出ばかりだが、あの頃は若者の過剰や逸脱をおおらかに許すという文化が寮にも、またその周囲にもうっすら残っていたように思う。

迷惑ばかりかけていただろうに、寮生だということと近所のご飯屋さんは、大盛りにしてくれたり、まけてくれたりした。樽神輿という夏に行われる寮最大の祭りの時は、ふんどし一丁で神輿を担ぎ天神から戻ってきた我々を、近くの商店街の人たちがわざわざ沿道に並んで出迎え、バケツで水をかけてくれた。

田島寮は2009年、六本松キャンパスが伊都キャンパスへ移転するのに伴い閉寮した。今の寮は单身アパートに近いスマートなものだという。間違いなくよいことだし、進歩だろうが少し寂しい気もする。「しごきを受けて少年的残存を切り捨て大人として成長するのを助ける」だったかどうかは分からないが、あの馬鹿馬鹿しい日々は、まぎれもなく自分の青春だったと思うからである。



#### 【著者プロフィール】

歴史小説家。宮崎出身。2003年九州大学経済学部経営学科卒。2013年『劉邦の宦官』（双葉社）でデビュー。以後も『九度山秘録』（河出書房新社）『戦国、まずい飯！』（集英社インターナショナル）等、歴史を題材にした小説・エッセイを執筆。

2023年、世界中の女性ヒーローを取上げた『世界史の中のヤバイ女たち』（新潮社）を発売。



# 岡崎次郎著『マルクスに凭れて 六十年：自嘲生涯記』(増補改訂新 版)を読んで

奥田 勉氏

1955(昭和30)年卒

本書は『資本論』に代表されるマルクス&エンゲルスに関する文献の翻訳に一生を捧げた同氏の自伝であると共に、わが国の社会思想史の中でその存在意義を問うものとして一読をお勧めしたい。

本書の構成は、第1部(戦前、戦中編)、生い立ちから一高、東京帝大、満鉄調査部まで。第2部(戦後編)は、『資本論』との再会、九州大学まで。九大教養部、九大から法政大学へ、そして大月書店版『マルクス=エンゲルス全集』の翻訳刊行においてマルクスから学んだものなど、からなっています。

第1部では河上肇の『貧乏物語』に触発されたことが述べられています。第2部では向坂逸郎教授の薦めで九大に赴任されたこと、そして昭和26年から初めは久留米の第2分校で経済学の教官を担当され、その後第1分校に統合された六本松に移られた

ことが述べられています。ここには、当時の諸先生の名前が登場します。(以下、敬称略)奥田八二(社会思想史、後の福岡県知事)、今来陸郎(西洋史)、

森耕二郎(農業政策)、高木暢哉(信用貨幣)、岡橋保(銀行論)、田中定(学部長)、高橋正雄(統計学)他多数の方々です。岡崎次郎教授のその後については、第13章「マルクスとの別れ」などをお読みください。

私は岡崎先生が九州大学におられた時期と全く同じ昭和26年から昭和30年3月まで第1分校と箱崎の経済学部<sup>に</sup>在学しましたが、先生の姿を見かけることはありませんでした。

当時の教養部では、具島兼三郎さんのファシズム批判の演説で講堂は満員でした。またフランス語の城野節子先生の講義も人気でしたが、リエゾンが難しくついていけませんでした。またいま話題の源氏物語の田村先生の講義をもっと勉強しておけばよかったなと後悔しきりです。

当時の第1分校にはまだ旧制高校の雰囲気ある学生寮がありまして、そこで私も1年間過ごしました。夜になると2階の廊下のストームでは、「ああ玄海の浪の華、銀蛇の舞いに似たる哉」と踊っていました。寮生の写真の最後列左端の白いマフラー姿が私です。



昭和27年1月 六本松第一分校学而寮にて

## 釣り特集

### 釣りと友情



九州大学名誉教授  
別府大学客員教授

西村 明氏

1971年4月に経済学部<sup>に</sup>赴任したのであるが、大阪の雑踏の中で育った私には、引っ越して初めて住んだ早

良郡東入部の一ツ家は冬には大雪でラッセル車が出て、夏には近くの室見川では蛍が乱舞し、山と川、田園に囲まれた静かな別天地であった。言うまでもなく、室見川の溪流に群がるハヤやフナを見たその日から釣り竿とバケツを手にして川に入った。日が沈み始める頃には山々が川面に浮かび、浮きは引切り無しに動き始め、暗くなるまで川端を歩き続けた。同時に手を休めると、静けさと孤独の喜びの中で久しぶりに自分の生き方と学問への再出発<sup>キチ</sup>を考え直す時間でもあった。この釣り狂ちは3年ほど続い

たが、箱崎の大学までバスと電車で1時間半程もかかるので、古賀団地に引っ越した。

大学では、最年少の助教授の私には全学的な役職としてレクリエーション委員が振り分けられた。仕事と言えば全学教員のソフトボール大会で文系チームの教員を組織することであった。経済学部でもそう簡単に出てくれる人もいなく、教授会でお願いしたりしたが、常時協力してくれたのは松下助教授と森本助教授であった。そして、時にはお互いのゼミでソフトボールの対抗試合をするまでになった。ある時、試合が終わり、打ち上げのパーティーをした際に、釣りの話が持ち上がり、恐らく学部でも釣り狂ちで知られるようになっていた私に、投げ釣りを教えてほしいと森本先生が言い出した。そこで、3人の都合の良い日時を設定し、津屋崎海岸の近くの河口で始めたが、重りが後ろに飛んでいくやら、糸が切れるやら大変な出だしであった。そこで、投げ釣りでなく、波の静かな津屋崎や神湊の防波堤に3人並んで浮きをつけて釣りを始めた。ここから、香住ヶ丘の松下先生、福岡の森本先生に古賀の西村で、いつの間にか「東部漁業組合」と名付けられた。しかしながら、漁業組合と言われるほどの釣果はあったことはなく、また頻繁に出かけるのでもなく、ただ時たま釣りを楽しむ集まりに過ぎなかった。

防波堤に着くや、3人は相互に2メートル程の間隔で座り、静かに釣りを始めた。それは糸が絡まないこともあったが、静かな時間と空間を楽しむことでもあった。青い海に浮かぶ浮きを眺めながら、また遠くに見える島々を見、時には隣に座る仲間の浮きが沈むのを期待しながら、仲間が魚を釣り上げれば、「よかったなあ」という以外は1時間も2時間も黙って過ごすのである。その間、私は、講義やゼミでの問題とか、研究上で解けない難問を考えたりしていた。恐らく彼らもそうであったと思う。なぜなら、釣れなくても、よほどのことがない限り、よい釣り場を求めて歩き回るようなことはなかった。また徐々に投げ釣りも上手くなり、夏には砂浜で、或いはボートで沖に出てキスや小鯛を釣り上げた。この場合には釣果を楽しんだ。このように、かなりの期間凝りもせずに、津屋崎から神湊、鐘崎まで釣り場を探し、さらには長崎で学会があった時にはその後によく釣れるであろうことを期待し、同じような釣りをしていた。「『私の勉強時間を奪うな』というオーラが漂っていた」(「森本芳樹氏オーラル・ヒストリー」『九州歴史科学』第37号)と言われるほど研究に打ち込んでおられた森本先生、同様に松

下先生も地域史研究者として被差別部落史や石高制の研究のために文献研究を越えて史実・実態調査に忙しく取り組んでおられた時期でもあり(松下志朗『遠い雲』海鳥社)、なぜ両先生が私のようなスポーツや釣り好きな人間と「組合」を結成したのかは謎である。

だが、私には、釣りの後の雑談、そして僅かなキスやボラ、イワシなどを塩焼きや天婦羅にしてビールで乾杯し、釣果よりも、松下先生と森本先生が日本と西洋の経済史と自らの方法論に関わって史実を追い求める状況、また関連する研究者と議論している問題を話し合われるのを聞くだけで疲れも取れて、本当に楽しい時間を持つことができた。同時に、お互いの論文・著書の交換も盛んになり、両先生の研究内容や方法を知るようになった。このようにして時間を重ねる中で、自己の学問への好奇心をもとに科学的そして徹底的に実態・史実を探究し、自己の研究命題を実証される姿を学ばせていただいた。また、釣り場に向かう車内、或いは竿を抱えて家路に並んで帰る途中での何気ない会話の中でも、自然に学んだような気がする。両先生は、研究において個性的、独創的で、簡単には他に譲り、自説を覆すような先生ではないが、釣り仲間としては実に温和で、相手を思いやり、優しい人であった。

しかしながら、研究課題に集中し、一時も時間を無駄にしない生活を過ごしておられた時期になぜに両先生は私と釣りをしたのであろうか。私はずっと古い釣り竿と道具を使っていたのに対して、松下先生は改革派であった。ある時、波間に先生の浮きが光っているのを見て、森本先生と私が驚いたこともあった。いつの間にか蛍光浮きを買入れられていたのである。また、近所の人と釣りに行かれていたようで、意外に先生は釣りが好きであったのではないかと、思っている。そして晩年、森本先生からも、「今となって(つまり老年に入って)みると、懐かしい『中年時代』でしたね。貴兄に釣りを教えてもらったので、ずいぶんと豊かになりました。」という手紙を頂いた。また東京に引っ越しされる前の2009年8月に奥様、お孫様と共に私の勤務地・別府に来られ、鉄輪温泉街で温泉に入り、両家族で食事をし、近況を語り合った。それから次の年の5月に別府大学で西洋史学会があり、そこに出席され、沸き立つ湯けむりが見える丘の上の食堂で昼食を共にしながら楽しい時間を過ごした。松下先生にも、是非別府に来ていただきたかったのであるが、残念ながら入院されておられ、出来なかった。退職後福岡

に戻ってから、自宅に近い和白病院に入院されておられたこともあり、何回かお見舞いに行き、よもやまの話をして別れた。兎にも角にも、釣りを契機に深まった友情の中で、私は、知的創造への喜び、そのために常に謙虚であること、努力すること、そして向上への意欲を高めることの重要性を両先生から教わった。

九州大学経済学部で30年間教育研究に従事し、素晴らしい多くの先生方や学生諸君に出会い、本当に楽しい時を過ごさせていただいたが、その中でとりわけ松下、森本両先生との出会いと、「釣り」と友情は私の学究生活への大きな支えであった。最後に、このような楽しい学究生活へ誘ってくれた九州大学名誉教授服部俊治先生に心からお礼申し上げたい。先生とも自宅の近くの池で釣りをしたが、相変わらず釣果はなかった。しかし、先生と中国北京商学院に行き、文化大革命の中で生まれた増減記帳法についての研究会に参加したが、先生は、この新しい記帳法に目を奪われている私や参加者に対して、貸借複式簿記の普遍性と科学性を明確に説明され、これを学習する現実的な意義を述べられた。私は、中国に行き、服部会計学の真髄を学び、いまもそれを基礎に研究を続けている。服部先生、松下先生、森本先生にはもうお会いできないが、経済学部で推し量ることのできない暖かい友情のなかで学問へのあるべき姿勢を学び得たことに深く感謝している。

.....

## 釣りの思い出



立教大学経済学部 教授

**池田 毅氏**

1993(平成5)年卒

1995(平成7)年博士入

今回、同窓会報にて「釣り特集」が組まれるということで、私の趣味の一つが釣りであることを知る大学院時代の恩師から依頼があり、寄稿させていただくことになりました。それほど面白い話も書けそうにもありませんが、私の釣りの思い出について徒然に記してみたいと思います。

私の生まれは九州の田舎ですので、同じような同窓生の多くもそうでしょうが、釣りは小さな頃から身近なものでした。毎年の夏休みに帰省していた祖父母宅の近くには川が流れており、毎日のように昼間は帰省中の従兄弟らと川泳ぎに没頭し、夕方には

川釣りに出かけていました。竹竿にテグスと釣り針を結び、小さなウキを付けただけの簡単な釣り具でしたが、近くの牛舎付近の土を掘り返せば出てくるミミズを餌にし、ハヤやフナといった小魚は子供でも難なく釣ることができました。ときに大きな鯉や鰻が釣れると、祖父母宅に持ち帰り、それを親戚の伯母さんがさばいて、鯉こくや蒲焼といった料理を作ってくれることもありました。

夏休みの帰省以外にも、小さな頃は父親が自宅近くの川へ釣りに行くのによく付き合いました。温暖な時期の夕刻に父親は長い竿に擬餌針の付いたサビキを付け、小さなハヤを大量に釣っていました。そうして釣った大量のハヤを自宅に持ち帰り、天ぷらとして調理していました。それほど美味しいものでもなかったですが、戦後の貧しい時期を過ごした父親の世代にとっては、貴重なタンパク源の摂取方法として馴染み深いものだったのでしょう。

小学校高学年ともなると休日に釣り道具一式を自転車で載せ、朝早くから友人らと遠くの川や港へ釣りに出かけることも多くなりました。もっとも、釣りに適した時間帯として朝マズメ・夕マズメという言葉があるように、真昼間にもなると魚はほとんど釣れなくなります。そうなるに従って別の遊びが始まります。周囲の倒木や竹を使って簡単なイカダを作って川下りを始めたり、下着一枚になって海遊びに興じたり、といった具合で、朝早くから釣りに出かけたものの、何の釣果もないまま帰宅することもよくありました。

釣りの思い出として最後のものは、大学院時代、研究の息抜きに友人たちとよく行ったバス釣りです。当時のバス釣りは、メディアで著名人らがその趣味を披露するなど、ちょっとしたブームになっていました。バス釣りはルアー（疑似餌）を使いますので、他の釣り比べて道具の数や種類が多く、愛好家にとってはその道具の収集も一つの趣味となります。当時は、天神のど真ん中のビルのテナントにバス釣り具ショップが出店するほどのブームでした（現在、google map上で天神周辺を検索しても釣具屋は出てきませんので、おそらくブーム終焉後に閉店したのでしょう）。

釣り具という点では、もともとバス釣りはアメリカで発達したものですので、アメリカのほうがその流通量も格段に大規模です。当時、日本はインターネット黎明期とも言える時期でしたので、実際にアメリカのバス釣り具の通販サイトを覗くと、大量の商品が売られていました。加えて、当時は円高が進



行していった時期でしたので、円換算すると日本で売られている商品価格よりも安価に感じられました。そこで試しに、海外通販を謳っているアメリカの大手のバス釣り具ショップのサイトにアクセスし、手持ちのクレジットカードを使っていくつかの商品をオンラインで注文してみました。今ではごく普通の海外ネット通販に過ぎないのですが、実際に数週間で自宅に商品が届いたときは、ちょっとした感動を覚えました。経済のグローバル化を身近に感じた最初の体験となりました。ちなみに、リールといった精密機器については日本メーカーのものは品質面では高く評価されているようですが、普及機としては安価なアメリカメーカーのものが一般的なようでした。

いささか話が逸れましたが、釣りの話に戻すと、福岡市周辺にはバス釣りのポイントとして知られている野池やダム湖、河川など多数のポイントがあり、大学院の友人たちと色々な釣り場を巡りました。とは言え、有名なダム湖に意気込んで向かったものの、釣果はさっぱりということも往々にしてありました(これも釣りあるあるです)。実際、私の最大の釣果は、ちょっと暇ができた隙に当時の箱崎キャンパスからほど近い宗像市の野池にふらっと独りで訪れたときのものです。そのとき50cmを超えるバスを釣り上げ、付近を散歩していた御老人に使い捨てカメラで記念写真を撮ってもらったことをよく覚えています(今であればスマホで自撮りといったところでしょうか)。

大学院修了後は、就職のため福岡を離れ、大阪に引っ越しましたが、大阪時代には一度だけ関西で有名なバス釣りポイントのダム湖に行ったことがあります。ただ、バス釣りブームは全国的なものでしたので、人口の多い地域になればなるほど、あまり釣れない(いわゆるスレた)ポイントばかりになる傾向にあるようです。私が訪れた関西のダム湖もその例に漏れず、丸一日かけて釣果はわずか一匹という結末になりました。その後、さらに東京へと引っ越すことになり、ますますバス釣りとは疎遠な生活になったまま現在に至ります。とは言うものの、釣り道具一式は今でも押入れの奥にしまっていますので、またいつの日かのんびりと釣りができる機会が訪れることを期待しつつ、筆を擱くことにいたします。

# リレー随想

## 大屋祐雪先生を偲ぶ会



統計ゼミ(大屋ゼミ)一期生

柴田 康之氏

1963(昭和38)年卒

「大屋祐雪先生を偲ぶ会」が開催されました。

私達の恩師、大屋祐雪名誉教授は2021年9月15日にお亡くなりになれましたが、コロナ禍の中、ご葬儀はご家族だけで行われ、私たちは残念ながらその葬儀に出席できませんでした。そして、その後も続いたコロナ禍の中では先生を「偲ぶ会」の開催も憚られていました。

その後、コロナが終息に近づいた昨年(2023年)9月10日、全国の「統計ゼミ」のOB達に我々が名幹事である嶋田正明君が献身的な尽力で呼びかけを行い、「偲ぶ会」を先生の亡くなられた2年後に開催する事が出来ました。大屋先生がはじめられた統計ゼミは、先生の教え子である故浜砂先生が後を継いでおられた関係で、「統計ゼミOB会」は両先生の教え子達で現在まで続いています。

「偲ぶ会」は、大屋先生の奥様と二人のご子息の祐輔氏(琉球大学病院長・副学長)と幸輔氏(大阪大学経済学部教授)並びに故浜砂先生の奥様をお迎えし、はるばる関東・関西在住のOB達も駆けつけて、福岡・天神の福新楼で盛大な会となりました。更に大屋先生が九大任官の端緒に関わられた児玉名誉教授も飛び入りで参加されて、ご家族との再会を楽しんでおられました。

偲ぶ会では、全員が先生との思い出を話す形で行われ、



「大屋祐雪先生を偲ぶ会」の祭壇及び先生の遺影



2023年9月10日「大屋祐雪先生を偲ぶ会」出席者集合写真  
 前列中央 大屋祐輔氏（遺影を手に）  
 向かって右に大屋先生夫人、浜砂先生夫人、大屋幸輔氏  
 向かって左に1人おいて筆者、嶋田氏

皆さんがそれぞれ先生との思い出を懐かしく話されていましたが、その話を伺いながら改めて認識した事が有りました。それは、私たちが学生時代よりも卒業後の方が先生から何らかのご指導を受けた者が多く、中にはご自宅までお伺いして仕事の悩みを相談した方もおられた事。さらに先生が国内の出張で行かれた先々のご訪問に合わせて統計ゼミOB会を開催し、必ずその場で何か新たに考えさせられるお話をされておられたこと。さらに海外に出張された時には、たまたまその時に海外勤務をしていたゼミOB生にわざわざ会いに行かれたこともあったことなどです。

事実、私自身が海外勤務で米国フィラデルフィアにいた時には、ご夫妻で訪ねて来られ激励を受けましたし、帰国後に東京で勤務中には何度も先生の上京に合わせたOB会でお会いし、お話しを伺いました。定年退職後、福岡に戻りましたら、何と「統計ゼミOB会」が頻繁に開催されており、当然ながら毎回出席しました。移転直前の箱崎の三畏閣での



1978年8月24日付、デュッセルドルフで滞在中の先生からお手紙（9月に帰路米国、ニューヨークとワシントンのご訪問の知らせ）

OB会は、いつも通り先生ご夫妻がご出席され、いつも通りの新鮮なお話をお伺いしたのは何とも懐かしい思い出です。このように先生は私たちにとって非常に親しみのある「人生の師」であられたこと、そして統計ゼミがこんなに長く続いている訳を、改めて認識した次第です。

偲ぶ会では、たまたま私は先生の奥様と同じテーブルの隣席になり、いろいろとお話をする機会がありました。発言するOB達の言葉を聞きながら、「あの人は知っているわ、この人も知っているわ」と懐かしそうに話され、ご高齢にもかかわらず、最後まで楽しんでおられたのがとても印象的でした。奥様からお伺いしていたお話しの中

で、「主人はお寺の出身でしたから…」と何度かおっしゃられたので、はたと思い当たったことがあります。それは先生が教え子に学問的指導に留まらず、いかに生きるかという人生指導をごく当たり前に行っておられたのは、「悩める者を導く」という僧侶的精神をお持ちになっておられたのではないかという事で、それは先生の最後まで変わらぬ私達に対するご対応でした。

偲ぶ会は和気あいあいの雰囲気の中、あっという間に時間が経ってしまいました。東京や大阪に在住の今回出席できなかった多くのOB達の為に、次は東京・大阪でも開催したいという話も持ち上がっていました。この「統計ゼミOB会」は驚異的に継続しており、その中で学年・年代を超えた多くのOB達と知り合えることが出来、更なる仲間同士親交を深める機会を得る会ともなっています。実際、私は先生のゼミの一回生ですが、この会を通じてゼミOBの方々と知り合い、ゼミ同期生、大学同期生の友人達の他に、この統計ゼミの後輩たちと親しく交際をするようになって、年数回は彼らと会合を続けています。飲む口実だと言われそうですが、私は統計ゼミOB会のお陰と思って大切にしています。これこそ先生がいつも言われておられた「大学でできる事は、良き師、良き友、良き書物に触れて、そこから何か得ることが出来る事だ」のうち、「良き師」は言わずもがなですが、「良き友」をこのゼミOB会の中から得る絶好の機会になっていたという事を実感している次第です。

大屋先生、「統計ゼミOB会」はまだまだ続きます。感謝・感謝です。合掌。

## リレー随想

昭和48年入学生 学年古稀  
同窓会に参加して

柳川・みやま消費生活センター  
坂梨 (颯川) むつ美氏  
1977(昭和52)年卒

### ・学年同窓会とは？

昨年10月14日土曜午後、私も昭和48年入学生208名中21名は伊都キャンパスに集い、学年古稀同窓会を無事行うことが出来ました。

10年前に、今回と同じ二人の代表幹事、福岡の嶋田正明さん(L-10)と東京支部同窓会事務局長の吉元利行さん(L-12)の音頭取りで還暦同窓会を敢行しました。還暦の節目に教養部を記憶に残したい面々が貸し切りバスツアーに参加、旧友たちと懐かしい六本松を散策し、伊都キャンパスにも。また、箱崎や筥崎宮でのお祝い、ライブハウスでの二次会までと大盛会でした。女子の一部は二日市温泉に宿泊して旧交を温めました。宿泊は大丸別荘！宿を選んだのは私でした。レジオネラ菌の全国ニュースを見て慌てて野下弘子さん(旧姓大平さんL-9)に電話すると、話の種が出来て却って楽しいと慰められ、仲間のありがたさを痛感した次第です。

今回はクラス幹事として関わり、同窓会とは、まず、思いついた有志ありきと実感しました。お二人が忙しい中で日程調整から会場選定、宿泊先の確保、二次会までの青写真を作成。嶋田さんは奥様の応援も得て会場となる伊都キャンパスや二次会場の居酒屋にも何回も足を運んで下さいました。お二人には紙面をお借りして心からお礼申しあげます。また伊東芳紀さん(L-9)には、今回、西日本新聞の合格発表記事をご提供いただきありがとうございます。嶋田さんの名簿作成に大変役立ったそうです。記事



には氏名と出身校がハッキリ！「個人情報」とは無縁だったのどかな時代の50年以上眠っていた貴重なお宝



でした。

2月からはグループLINEに立花洋介さん(L-11)、養父規幸さん(旧姓山本さんL-12)もクラス幹事で合流、事務手続きのチェックや参加呼びかけの広がりなど全員の協力で会が成功した、と改めて皆さんに感謝します。そして何より遠路はるばる関東や関西からもご参加下さった皆さん、本当にありがとうございました。残念ながら参加できなかった皆さんに同窓会当日のご報告をさせていただきます。

### ・古稀同窓会とは？

会場は亭亭舎。六本松教養部のあの宴会場の看板が入りに掲げてありますが、高い天井と古民家風の梁や柱を配置したおしゃれな研修施設に生まれ変わりました。広い窓からは遠くに福岡市街の眺望も。当日はお天気にも恵まれ参加者からは絶景に称賛の声も。六本松時代の古時計は、松の実会会長の志村恭子さん(旧姓井手さんL-9)から、当時の久保学長への女性たちの働きかけで運ばれたと伺いました。眺めると、あの有名な曲が流れてくるような…捨てられずよかった！映画のハリーポッターの時計に似て貫禄のある存在です。

会では、全員が各々現在、過去そしてこれからのについて語りました。さながら自分史の朗読会のよう。あつという間の充実した2時間でした。私は嶋田さんから同窓会報の記事を頼まれて断れず、皆さんの話をせつせとメモするのに一生懸命で、自分が差し入れた中華ちまきしか食べなかったと気付きました。後の祭り。ただし、中尾隆義さん(L-11)から商社マン時代のお話を聞き、速攻差し入れの赤ワインに飛びついたのですが、残念ながら一口だけで十分味わえず。中尾さん、次回東京では、また差し入れを是非。ワイン大好きな田中途予子さん(旧姓光門さんL-12)からもリクエストが入りました。

皆さんのエピソードの一部は以下に。

リタイア後の第二の人生を社会福祉法人で張り





切っておられる複数の方々。現役時代のキャリアをそのままにコンサルでご活躍の方。銀行マンより好きな旅行を選んだ旅行会社社長。自営業で奮闘中の方。難病を抱えたお子様をご心配な方。奥様と社交ダンスを楽しむ優雅なリタイア組。長年大学と関わり、研究や指導以外にも大学教員に課せられるノルマで九大の未来を危惧される名誉教授。学生時代のハチャメチャな武勇伝や教官との関わりなどを巧みな話術で場を盛り上げる方。上司と対立して一念発起、大学院で学び直し現在はコンサル仲間とZoom等や各地での講演活動で忙しい方。腰を痛めてシングルプレーヤーだったゴルフが出来ず、今後の事業のことも考えたいという公認会計士の方。30年来の趣味の水泳はマスターズの粋で、九大アメフト部のサポーターやゼミの同窓会幹事などボランティア人生を謳歌している方等々。皆さん基本真面目で安心して話せる方ばかり！同じキャンパスで学んだ者にしかわからない不思議な連帯感と信頼関係は得難いものです。同窓会の良さを改めて実感しました。

#### ・一次会の後は？

一次会が終わると、二次会参加者は構内を路線バスで効率よく移動。各施設の見学や総合グラウンドで練習中のアメフト部員との交流の機会も。ちなみに嶋田さんの粋なはからいで残りのお料理は全て若者の胃袋に。SDGsの観点からも◎ですね。文系キャンパスでは掲示板を眺めて学生時代に思いを馳せ、名誉教授の肝いりで図書館も自由見学。その後バスで周船寺駅近くの二次会場の居酒屋に行くと、先客のコールアカデミーの学生たちが即興のライブ、ラッキーだったそうです。私は残念ながらボランティアの当番があり二次会に参加できず、図書館もライブもとても心残りです。頂いた写真の皆さんの

笑顔を見て想像して楽しみました。

#### ・終わりに

還暦同窓会を遡ること数年以上前、L-10クラス同窓会に嶋田さんから誘われ、柳川観光のハイライト・白秋祭に参加しました。町の人達による花火やシャボン玉のおもてなしもあり、夜のどんこ船のクリーク巡り、最後の船から見る花火までとても幻想的で素敵でした。美味しいお寿司に御花の宴会も、立花さん本当にありがとうございました。私の中に「同窓会はいいもの」との刷り込みが…その後柳川に消費生活センターが開

設され相談員として今に至り、不思議なご縁を感じます。

打ち合わせの中で知った仲間の訃報やハガキの返信からも色々なご事情をお察ししました。天災など明日のことは誰にもわかりません。古稀同窓会に参加出来て本当に幸運でした。今を大切に自分らしく、が目標です。皆様、どうぞお元気で。ありがとうございました。

#### リレー随想

## 逢坂先生の「卒寿」に寄せて



電源開発株式会社

小林 真幸氏

1979(昭和54)年卒

「ただただ感謝です！！」

逢坂先生、健やかに「卒寿」をお迎えになられ、誠におめでとうございます。これからもどうぞご健勝であられますよう祈念申し上げます。

先生の「卒寿」に寄せてのはなむけの投稿をさせていただくのに、小生が果たして相応しいのかどうかの思いもありましたが、吉元君（東京同窓会副支部長）や同窓会本部事務局からの誘いも頂きましたので、僭越ながら投稿させていただきます。

小生は、ゼミでの劣等生だと思いますし、いろいろご心配もおかけしましたが、おかげさまで無事卒業し、本日までつつがなく会社勤めできたことは、ご指導くださった逢坂先生のおかげであり、只々感

謝であります。

寄稿に当たり、逢坂ゼミでの思い出を、二つご紹介させていただきます。

一つ目は、ゼミでの「飲み会」と先生の替え歌の話です。「三畏閣」および九大付近の店で時々「飲み会」をしていました。飲み会での話題もさまざまだったと思いますが、先生はゼミ生の話によく耳を傾けられ、所々ポツリと関連したお話をされてたように記憶しております、非常に和やかな会でした。

お酒が進み、気分が乗って来られると先生は、いつも決まった歌を歌われ、それを覚えた我々もいっしょに歌っておりました。確か、エノケン（榎本健一）さんの「月光値千金」の替え歌だったと記憶しています。原曲は、アメリカのポピュラーソングですが、エノケンさんが歌った訳詞をもじって、ドイツ語交じりで「SchönesのMädchenと街で逢ったなら…優しくKüssenしちゃいなさい…あ～あ～いけすかない い、いやな方だわね…そう言ってニッコリと笑ったならば 彼女はもちろん貴方のものですよ…」と歌われていました。（間違ってるかもしれませんが。うろ覚えで申し訳ございません）。

小生ドイツ語経済も全く不勉強でしたが、この歌と単語は不思議と覚えておる次第です。

二つ目は、ゼミ生で大野城にある先生のご自宅に伺い、大騒ぎさせていただいたことです。前出の吉元君の以前の寄稿で、小生が大野城までの電車賃を貸してあげたと書いてありましたが、殆ど記憶にございません。ただ、綺麗な奥様（確か元「ミス大牟田」でいらっしやったと記憶しております）の手料理をご馳走になり、大騒ぎしたように思います。すみません。飲み過ぎで記憶が吹っ飛んでおります。先生の非常に気さくで懐の深いご人徳ゆえに参加したゼミ生は皆それぞれの思い出の中にあるものと思います。

さて、小生も卒業後、電力業界に身を置いて参りましたが、本年度で会社生活にピリオドを打ち、第二の人生のスタートとなる予定でございます。毎年先生から頂戴する年賀状には、励ましと同時に世の中の動向を憂いておられるコメントも頂戴し、有り難く拝見しておりました。電力設備の設置と安定的な運転、保守のためには、国、県、市町村等の行政はもちろんですが、何よりも地域住民の方々の長い期間にわたるご理解、ご協力が不可欠でありまして、会社生活の中での多くの部分は、そうした様々な方々との対応の仕事でございました。やはり、どんな時代でも、人と人とのコミュニケーションが非

常に大事なことだと痛感しております。小生、先生の研究分野の「経済原論」のほんの僅かな部分を単にかじっただけの身ではございますが、この高度なIT社会にあっても、また、この混迷な時代であっても人間の欲求、営みと経済との関連はなかなか難しい問題だなあと改めて考えさせられる次第です。これからも日々勉強でしょう。

先生におかれましては、これからもご健勝であられますことを祈念いたしますとともに、我々を引き続きご指導いただきますよう、重ねてお願い申し上げます。

拙稿にお付き合いくださいまして大変有難うございました。

## リレー随想

# 人生の進路を変えた経済学との出会い



北九州環境プラントサービス(株)  
代表取締役社長

楠 雅之氏

1982(昭和57)年卒

## 第一章 大学入学まで

昭和32年4月、温泉都市として有名な大分県別府市に生を受けました。物心ついた5～6歳頃の記憶では、住んでいた家には台所に竈があり、冷蔵庫は鉄枠と木枠製で、上段扉に氷柱を入れて下段に冷気を送るタイプでした。電化製品と言えば照明、炬燵、扇風機にアイロン位。それでも当時の平均的な家庭だったと思います。

昭和39年小学校入学の年にオリンピック、昭和45年中学入学の年に大阪万国博覧会、昭和48年高校入学の年に石油ショックと何かと節目に大きな出来事が起こる巡り合わせか、高校3年になる昭和50年の春休みに父が亡くなり母子家庭になりました。翌年の大学受験に備え受験勉強に精を出さねばならない時期でしたが、母に近場の大学進学を懇願され、父の郷里の福岡市にある九州大学進学を決めました。進学にあたっては当時、親戚が勤めていた新日本製鐵（以下新日鉄）の八幡製鉄所（現 日本製鐵 九州製鉄所）若しくは実家近くの大分製鉄所への就職を念頭に工学部の鉄鋼冶金学科を選びました。今振り返れば、ここまでは自身の意思というより何となく示唆されたレール上を歩んでいました。

## 第二章 大学時代の思い出 入学から工学部時代

昭和51年4月、別府から出てきた福岡市は大変な都会に感じました。西鉄電車が次第に姿を消しつつある時期でしたが、未だ天神を中心に電車が縦横に走り、真新しいダイエー、松屋レディス、岩田屋、更には同年秋には天神地下街がオープンし、天神地区は田舎者の私には将に大都会の中心そのものでした。

楽しかった六本松の教養部と異なり工学部では、高校生活の延長のようにアパートと教室を往復する日々で、4年生になると研究室配属となり卒論のための研究実験中心の毎日となりました。そんな日々を大きな疑問もなく過ごしていたある日、経済学部の友人の部屋で何気なく手に取った一冊がアダム・スミスの『国富論』でした。目から鱗とはこの瞬間でした。こんな楽しい学問があるのか！とその奥深さも分からずただただ、その分野へと引き込まれていきました。

それからというものどうすれば経済学が学べるかと道を探ったところ、学士編入学という制度があることを知りました。編入学のためには、学士であることが必須のため、まず工学部を無事卒業し工学士となる見込みを得る事に加え、経済英語の試験と志望動機を記述した小論文並びに経済学部長を始めとした教授陣による面接をクリアする必要がありました。4年生の8月から工学部大学院進学への道に代え、卒論研究をする傍ら、学士編入学受験準備に勤しみました。難関は経済英語の試験でポール・サミュエルソンの『ECONOMICS』を原書で読み、経済学の用語とその意味を将に受験勉強しました。編入学試験は大学入試が終わった3月10日頃だったように思います。合格通知は数日後でしたが、工学部の卒業式ギリギリだったと思います。若し不合格だっ

たら行く当てもなく、あの時の不安はその後もトラウマとなって今でも時折よみがえってきます。

## 第三章 大学時代の思い出 経済学部時代

昭和55年4月、工学部を卒業し何とか無事に経済学部経済学科に学士編入することができました。3月の面接試験官は、片山伍一経済学部長、都留大治郎教授、原田實教授だったと思います。面接時、工学部から来るのであれば経済工学科を希望しないのかと聞かれ、統計学より経済思想を中心に学びたいので経済学科を希望すると答えました。

結果、都留大治郎先生のゼミに入れて頂き、農業経済学をご指導頂くことになったのですが、当の教授は大変お忙しい方で、ゼミの運営は原伸子さん(現在 法政大学名誉教授)という若くて美貌の助手を中心に4年生と新入3年生の約20名で週1回の開催でした。

さて、3年次に編入し、勇躍して経済の勉強を始めました。改めて前述の『国富論』と『ECONOMICS』を再読後、マルクスの『資本論』やアフレッド・マーシャルの『経済学原理』、更にはやっぱり近代経済学も学ぼうとJ.M.ヘンダーソン&R.E.クウォント共著の『現代経済学』やR.G.D.アレンの『経済研究者のための数学解析』等を乱読しました。工学部とは違う余裕ある時間の使い方ようやく大学生活を謳歌している実感が湧いてきましたが、経済学部生は2年半の期間中に84単位取得が卒業に必要な一方、学士編入学生は2年間で82単位が必要でした。工学部時代の生活習慣の効用もあり、3年次の前期試験で78単位を取得出来ました。要因は二つ。当時の経済学部では授業のコマ割りを事前に届け出る登録制ではなく、試験にさえ合格すれば単位取得できたことと優秀な講義ノートを確保できる人脈に恵まれたことでした。しかしながら油断しすぎて結局、4年後期まで4単位が残ってしまい、就職が決まって遊学できるはずの半年間に必須語学と一般を念のため二つずつ受講する羽目となり、合格発表まで再びトラウマと過ごすことになってしまいました。

私自身は、折角経済を勉強したので日本開発銀行や日本銀行等の政府系金融機関を第一志望群にして先輩からお話を聞き興味を深めていたのですが、最終的には日本開発銀行と新日鉄の2社択一となりました。マル経系統の勉強が強く影響したのか今となっては定かではないのですが、生意気にも直接、社会の労働者のために尽くす仕事をしたいとの思いから新日鉄に入社することにしました。就職先が決まり、恩師の都留先生に報告に行くと、「君はてっ





きり大学院に進むと思っていたら、何だ、民間企業に就職するのか」と、お叱りを頂くと同時に、「まあ、新日鉄なら仕方ない、嫌になったらすぐに戻ってきなさい」と驢（はなむけ）のお言葉を頂いたことを今でも覚えています。都留先生には卒業後も結婚式に主賓としてご臨席頂く等公私共に大変お世話になりました。

#### 第四章 社会人となってから

昭和57年4月に入社しましたが、配属先は親戚のいる八幡製鉄所でも郷里の大分製鉄所でもない千葉県にある君津製鉄所配属となりました。母はさぞや落胆したことでしょう。当時の君津市は人口8万人の農漁村に巨大な製鉄所ができて十数年を経たころで、警察署も主要国道に街灯もなく大いなる田舎でした。配属先は何と要員合理化を企画実行する部門でした。折角、「社会の労働者のために尽くす仕事をしたい」との思いから新日鉄に入社したのに、最初から現場の労働者の合理化を行う仕事に従事せねばならず、マルクスの言うところの「労働者が資本家により搾取される賃労働の悲惨さから解放するため階級のない共同社会を目指す」に対して私の仕事は真逆ではないのか！？

自身の仕事の意義とカルチャーショックを乗り越えるのに大いに時間を要しましたが、以後の会社人生の中で、仕事を通じて如何に社会のために貢献できるかをやや長いスパンで考えつつ業務に従事できたように感じています。

#### リレー随想

## 1988年卒逢坂ゼミナール同窓会の開催



(株)吉川工務店 代表取締役  
**進 研一**氏  
1988(昭和63)年卒

私は、経済学部経済学科および逢坂ゼミナールに所属し、1988年に九州大学を卒業した進研一と申します。卒業後は西部ガス(株)へ入社し、現在はグループ会社である(株)吉川工務店に勤務しています。昨年度より、西部ガスホールディングス(株)道永会長が同窓会長に就任されましたので、更に同窓会を盛り上げていきたいと考えています。

さて、卒業して早いもので既に36年が経ちましたが、この度4年ぶりとなる1988年卒逢坂ゼミナール同窓会を開催しましたので、その様子をご報告いたします。

私が逢坂ゼミの門を叩いたのは、先輩方々から逢坂先生の素晴らしい人柄やゼミの雰囲気もとても良いと伺ったからです。案の定、応募者多数で、お困りになった逢坂先生は応募者を2班に分けて、それぞれの班の出席番号が一番の人同士でじゃんけんをし、勝った方の班を入らせることとされました。私の班は一ノ瀬君が担当しましたが、みごとに勝ってくれたことで無事同ゼミへの参加ができたという運命的なできごとがありました。

結局同期は14名となり、萩での研究合宿、懇親ソフトボール大会、逢坂先生宅に全員で伺ってのウォーキング&懇親会等、勉強に懇親に大変有意義な時間を共有させていただきました。

卒業する時点で、同年度の永久幹事をあみだくじで決めるということになり、何と私が幹事役を引き当ててしまい、地元に残ることを決めていた私のこれまた運命かと感じました。

そこで早速ゼミメンバーで話し合った結果、卒業後は、5年に一度同窓会を開催しようと誓い合い、これまで途切れることなくそれを継続してきました。また、第6回目に当たる2017年に開催した際に、「みんなもう歳を取ってきたので、いつ何が起きるかわからない。これからは2年に一度開催しよう！」となりましたが、残念ながら新型コロナウイルスの蔓延により、2019年に当時ゼミ同期の森君が勤務していた熊本市での開催を最後に開催ができなくなっていました。

このような事態になるとコロナが少し落ち着いてきても、なかなか私から「同窓会の開催を！」と申し上げにくい状況もあり、どうしたものか悩んでいました。そういう中、2023年6月6日の九州大学経済学部同窓会福岡支部総会に参加したのですが、そこでゼミ同期の山中君とお会いし、昔話に花が咲くとともに二人で「是非、今年同窓会を開催しよう！」と決意したのです。

早速、SNSやメール、手紙を駆使し日程調整に入りました。その中で、同じLINEグループに参加していただいている逢坂先生からも激励のご連絡をいただきましたが、何と！先生は90歳の卒寿をお迎えになったとのことでした。いつもお元気でいらっしやっただ先生ですが、そのご年齢を伺うとさすがにご参加は厳しいかもと勝手に考えていましたが、何



懇親会 於 博多かんべい別邸  
後列左から、渡邊君、甲斐君、一ノ瀬君、重枝君、逢坂先生、三木君  
前列左から、山中君、森重君、森君、山口君、筆者



伊都キャンパスツアー

と！先生からは是非参加したいとお申し出があり、その鉄人ぶりに驚かされました。

また、せっかく全国からメンバーが集まるのですから、懇親会以外にも何かできないかと考え、以前先生から新しい伊都キャンパスの散策をゼミのメンバーとしたいと言われたことを思い出し、その調整も開始しました。

結局、紆余曲折の調整の末、日程：11月4日（土）、行程：伊都キャンパス自由散策ツアー～中洲での懇親会ということに決定し参加者を募りました。

その結果、参加メンバーは、逢坂先生、福岡から山中君、渡邊君、進、北九州から重枝君、大分から甲斐君、対馬から森君、関西から一ノ瀬君、関東から森重君、山口君、中国から三木君の11名が参加となりました。残念ながら、桂木君、烏田君、川辺君、國武君は所用により欠席でしたが、中国在住の三木君を始めなかなかの出席率で、みなさんお互い会いたかったんだろうなあと感じました。

さて、当日は、九大学研都市駅に無事全員集合で、

同窓会をスタートしました。

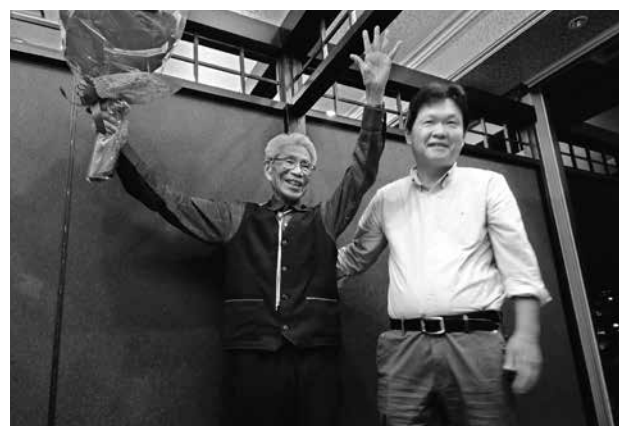
まず、伊都キャンパスに移動し、自由散策ツアーです。広大なキャンパスに圧倒されながら、当然全部は回り切れないので、文系キャンパスを中心にルートを組みました。また、当日は何と！学園祭の開催期間中で多くの学生さんたちで賑わっており、この偶然にも驚きました。

結局、椎木講堂～文系キャンパス（法学部～経済学部）～学食～大講義室～図書館～教養部（学祭会場）を約1時間で回りました。文系キャンパスは最後に完成しただけあり、まだ新しく広々として、このような環境で勉学に励める現在の学生さんを羨ましく思いました。また、図書館も設備・蔵書数が充実されており、上の階から吹き抜けを見下ろした風景がいわゆる映えスポットでした。

伊都キャンパス自由散策ツアーの終了後は、九大学研都市駅から中洲へ移動し、中洲川端駅近くの居酒屋でお待ちかねの懇親会です。まず、先生より「間もなく還暦を迎える君たちへ！」と題して、サミエル・ウルマン「青春」、千武陵「勸酒」の二つの名言をご紹介いただき心に染み入りました。その後、各メンバーからの近況報告がなされ、最後に「卒寿のお祝いとして」全員からの花束を贈呈させていただき、懇親会も盛況のうちに無事終了しました。

懇親会では、メンバー全員が還暦を迎える2年後にまた同窓会を開催することを誓い合いました。また、先生をはじめ、参加してくれたメンバーが喜んでくれたことは大変うれしく、幹事冥利に尽きると感じました。引き続き地元で頑張っ、ゼミナール同窓会を可能な限り継続していきたいと思いました。

最後になりますが、LINEで窓口になっていただ



逢坂先生花束贈呈

いた逢坂先生の奥様、先生を車で送り迎えしてくれた山口君、伊都キャンパス見学ツアーの事務局、事前の下見ツアーで丁寧にのご案内いただいた3名の学生さんに深く感謝し、私のご報告を終了します。

## リレー随想

# タイでの九州大学同窓会 (ガオ会)との出会い



東芝デジタルソリューションズ(株)

森田 俊一氏

1991(平成3)年卒

1991年経済学部経済学科卒の森田と申します。卒業後、東芝に入社し、ずっとICT事業に携わってきました。現在は、タイの現地法人に出向し、新規事業の開発に従事しています。今回の機会をお借りして、タイの九州大学同窓会について紹介をさせて頂ければと思います。

## 1 タイへの赴任について

入社以来、ずっと国内ビジネスを担当しており、海外ビジネスとは無縁でした。30代の時は、海外赴任を希望し、英会話スクールに通っていたこともありましたが、しかし40代半ばになると、管理職に就き、もう海外勤務を命じられることはないだろうと、海外赴任のことは頭の中から消えていました。

ところが、2021年の年末に役員から電話がかかり、異動の打診がありました。「来年はタイで頑張ってもらおうと思うけど、どう」との打診。海外という発想がなく、「どこの県にありましたっけ」と全くかみ合っていない質問をしてしまいました。役員から「タイは、海外のタイランドだよ。分かるよね。君、前から海外勤務希望していたよね。いい経験になると思うけど」との回答。正直、この時は思考停止してしまい、「少し考えさせてください」というのが精いっぱいでした。不安はあるものの、このチャンスを逃すと海外で働くことはないだろうと思い、引き受け、結果、2022年4月からタイに海外赴任しています。

当時は、コロナ禍の真っ最中。入国後、ホテルの部屋から一歩も出られない10日間の地獄の隔離生活を経て、働き始めました。しか

し、会社はWFH(ワークフロムホーム)が徹底され、誰も出社していません。意地で会社に出社していたものの、誰がスタッフとして働いているかも全く分からず、相談する相手すらいない状況。お客さまへの訪問も、訪問を許可頂けるお客さまは少なく、Web会議などリモートでの挨拶ばかり。5月からはロックダウンになり、レストランは閉まるし、公共の施設も閉鎖され、平日は事務所で社長と2人きり、休日は部屋に1人で籠りきりという気が滅入る日々がしばらく続きました。

そんな中、たまたま知り合った福岡出身の方から、福岡県人会があり、約200名が登録しているというのを聞き、慌てて窓口の方にメールをして、登録をしました。その後、少し規制が緩和された時期に、同じ福岡県出身ということで一緒にゴルフに行った方(福岡県庁の方)に、タイにも九州大学同窓会があるというのを聞き、事務局をされている方の連絡先を教えてもらい、連絡をしてみました。そこで初めてタイの九州大学同窓会「ガオ会」との「つながり」を持つことが出来ました。

## 2 タイ九州大学同窓会「ガオ会」

「ガオ会」。なぜ「ガオ会」なのと思われると思います。タイ語で数字の「9」は「ガオ」といいます。九大の会なので、「ガオ会」。結構、親しみをもてる名前だと思うのですが、いかがでしょうか。

事務局の方から、2022年1月に新年会をするから参加しないかと言われ、参加してみました。非常に楽しいひとりで、優しく受け入れてくれたことが嬉しかったです。しかも、故郷の話をしている中、もしかしてと思い聞いたら、なんと、同じ小学校出身の方だと分かるなど、サプライズもありました。それ以降、出来るだけイベントには顔を出すようにしています。



写真1 2023年 ガオ会新年会





写真2 2023年3月 KYUDAI NOW (バンコクにて)

2024年1月時点で、約30名が「ガオ会」に所属しています。2023年くらいから若い人たちが増えてきました。それから、九州大学からタイの大学に来られている先生もいらっしゃいます。「ガオ会」で何をしているかといえば、情報共有会と称した飲み会、親睦会と称したゴルフコンペ参加です。

飲み会は、年に3回。土日開催だと遠方から2～3時間かけて参加される方もいます。基本、思い出話を中心。世代は30～60代と幅広いのですが、大学時代の思い出は、意外に共通だったりします。箱崎にあった(ある)居酒屋、大学時代のサークル・授業・食堂の思い出(田島寮、三畏閣などの話題も出てきます)で、すっかり忘れていた思い出が蘇ってきます(写真1)。

ゴルフコンペは、対抗戦(七帝戦)が年に4回あり、各大学でスコアを競い順位を決めます。大学持ち回りで幹事をしています。それとは別に、七帝vs早慶ゴルフ対抗戦というのもあります。一時期、九州大学が3連覇したこともありましたが、最近では低迷しています。

2023年3月には「Kyudai Now」というイベントがバンコクで開催され、九州大学の最近の研究成果が発表される機会があり、合わせて「ガオ会」とタイ人の九州大学同窓生が集まるイベントが開催されました。60名に近い卒業生が集まったのは奇跡だと思っています(写真2)。

同年9月には経済学部の清水教授が来泰され、経済学部卒業生で集まりました(写真3)。2022年夏

には九州大学東京同窓会にWebで参加、「ガオ会」を紹介する機会も頂きました。なお、「ガオ会」は昨年末に九州大学同窓会連合会に加盟しました。

### 3 「ガオ会」での「つながり」について

実は、日本にいた時は、九州大学でのつながりを意識することは皆無でした。慶応の三田会、早稲田の稲門会など活動が盛んな大学もあります。人脈が多くて羨ましいと感じることもありましたが、特に自ら積極的に九州大学同窓会との「つながり」を持つとうともしませんでした。海外に出てみて、業種を超え、世代を超えた「つながり」が大切だと感じるようになりました。会社にいると、どうしても会社の中での人づきあいを中心になります。ともすれば視野も狭くなるし、発想も硬直化しがちです。

他にもさまざまな「つながり」の会はあります。県人会、同業種の会などなど、「つながり」を持つ会はたくさんあります。ただ、大学の同窓生は、



写真3 経済学部同窓会の集い(清水教授ご来泰)

世代や業種を超えて、何か不思議な「つながり」があるように感じるのです。同じ時代に大学にいたわけでもないのに。

タイにいと、日本の存在感の低下を感じる人が多いです。中国や韓国の勢いを感じます。だからこそ、業種や世代を超えた「つながり」を大事にして、新たなものを創り出していけないのではないかと感じます。「ガオ会」の中の「つながり」から、異業種連携によるコラボレーションが生まれたら素晴らしいと考えています。

#### 4 海外赴任のおすすめ

最近、各企業の赴任者は若い人が増えてきたように思います。その一方で、海外赴任をしたくないという人も多くなっていると聞きます。タイは、海外赴任には最適な場所です。日本人も多いですし、タイ人も、まだ日本を大切なパートナーと見てくれています。それに「ガオ会」の約30名の仲間もいるし。それに、現地の日本では味わえない文化や自然に触れあえることが出来ます。私も昨年タイのお祭りやイベントにいくつか参加してみました（写真4、5、6）。



写真4 ピーターコーン祭り（ナーン県）



写真5 ロイクラトン祭り（チェンマイ）



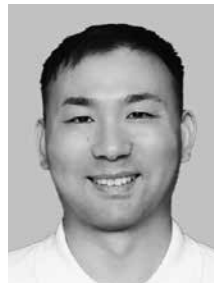
写真6 ハーフマラソン大会に参加（古都スコタイ）

皆さまにもぜひ海外での生活やビジネスを経験して欲しいと思っています。そして、もしタイに赴任となった時には、タイに同窓会があったなと思い出して欲しいと思います。いままでとは違う「つながり」を持てるはずだから。

バンコク福岡県事務所、九州大学同窓会連合会などにコンタクト頂ければ、ガオ会の連絡先が分かります。

### リレー随想

## 学びと成長の旅



上海社会科学院経済研究所

王 佳氏

2013(平成25)年博士入

2008年に、九州大学経済学部の研究生として入学し、その後の生活は私にとって非常に充実したものでした。当時はまだ研究者としての道を選び始めたばかりで、目の前に広がる経済学という未知の世界に、大きな好奇心と探究心を抱いていました。その時、中国と日本のバブルについての比較に関心があり、荒川章義先生（現立教大学経済学部教授・経済学部長）のご指導のもと、「中国経済と日本のバブルについての比較分析」という論文を完成し、修士課程を修了しました。しかし、同じ「バブル」といっても、その背後にある経済や社会の仕組みがかなり異なることを理解し、中国のバブルをより専門的に取り組むことを目指し、博士後期課程に進みました。この決断をするにあたり、磯谷明德先生から多くのご助力を得ました。その後、磯谷先生のご指導のもと、中国の住宅価格について制度の側面から研究すること

に専念しました。

大学院磯谷ゼミは、活発な議論と深い学びの場でした。毎週のゼミでは、先生からの鋭い質問や院生同士の議論を通して、自身の考えを深め、批判的に思考する力を養いました。また、先生は大学院生一人一人に丁寧な指導をされ、研究への情熱を育ててくださいました。そのおかげで、研究の経験を蓄積し、国内外の学会やセミナーに参加し、他の研究者との交流を通じて自らの視野を広げることができました。そして、研究者としての素養を磨き、批判的思考力と問題解決能力を養いました。2016年に博士後期課程単位取得を終え、同年に助教として九州大学経済学府に留まりました。この頃には教育活動や学部生・大学院生の指導も行いながら、自らの研究も継続しました。2018年には「中国の住宅価格に関する実証研究」という博士学位論文を完成させ、博士号を取得しました。長年の研究努力が実を結び、大きな達成感を味わいました。

2020年、中国への帰国を決意し、上海社会科学院経済研究所で研究を続けています。中国帰国後、私は中国経済のダイナミックな変化を肌で感じています。また、中国の研究者との交流を通じて、新たな研究視点を獲得することもできました。現在、私は中国の経済発展と制度改革に関する研究プロジェクト



2018.10.8 磯谷ゼミ合宿 九重「山の家」



2018.3.20 卒業祝賀会 福岡リーセントホテル

トに携わっています。具体的には、中国の不動産市場にかかわる諸制度の制度改革と国際貿易投資にかかわる国際ルールなどを研究テーマとしています。

学生時代は、研究に没頭した日々でした。特に、磯谷ゼミでの経験は、私の研究者としての礎を築いてくれました。先生やゼミの仲間たちとの議論は、今でも鮮明に思い出します。特に思い出に残っているのは、毎年夏休みの合宿です。ほとんどの場合が「九大山の家」でした。温泉付きの山の家は毎年楽しみにするところでした。一日の研究報告と議論と論文指導を終え、みんなとバーベキューをしながら、幸せな気分楽しいことを話していました。そして、温泉でリラックスした後、深夜までゲームや雑談をやりました。

学生時代は幸せな時でした。九大での生活は、私にとって刺激的な経験です。異なる文化に触れ、様々な人と交流することで、視野が広がり、研究者としての成長を感じました。経済学府では多くの先生と先輩や同期たちからの助力をいただきました。友情と愛情、学業と事業とを共に獲得しました。研究生の時、修士入学試験のためのマクロ経済学の勉強では、故平方裕久先輩から多くの助けをいただきました。その時、どんなにくだらない質問でも彼は真剣に答えてくれました。同じく磯谷ゼミに所属する劉丹氏と知り合い、恋愛し、結婚し、今は5カ月の女の子がいます。一番感謝したいのは磯谷先生です。先生の厳しさがあったからこそ、私は無事に博士号を取得し、研究者としての資格を得ることができました。今でも、九重「山の家」へ行くバスの中で、私の博士学位論文について、先生と激しい議論を繰り返したことを時々思い出します。中国へ帰国する際には、磯谷先生宅に招かれ先生の温かい励ましの言葉、奥様のおいしい料理と意味深い「鯛のスープ」は一生忘れられません。



2024.1.23 磯谷ゼミ新年コンパ  
九大箱崎キャンパス「中華料理 帰郷」



学生時代から現在まで、私は経済学という学問を通して、社会の発展に貢献したいという強い思いを抱き続けてきました。今後も研究者として研鑽を積み、中国経済に関する深い知見を活かしながら、社会に貢献できるような研究成果を生み出していきたいと考えています。将来は、中国と日本の研究者間の交流を促進し、相互理解を深める活動にも積極的に

に取り組んでいきたいと思っています。これまでの人生を振り返ると、多くの出会いと学びに恵まれたと感じています。九州大学での学びと研究経験は、私の研究者としてのキャリアを築く上で非常に貴重なものでした。恩師やゼミの仲間たち、そしてこれまでの職場で共に働いた人たちには、感謝の気持ちで一杯です。

## 人物往来～退任

### 九州大学ビジネススクールの退任にあたって



経済学研究院教授

**村藤 功氏**

専門分野：企業財務

2003年4月から九州大学ではビジネススクール(QBS)を始めることになり、私は東京のコンサルティング会社で総合商社の破綻回避をはじめとしたM&Aアドバイザーをしていたが、「企業財務」「企業価値創造とM&A」と「プロジェクト演習」を担当するために福岡にやってきた。それから21年たち、2024年3月末で定年退職になる。これまでの私の職業人生において前半は投資銀行・コンサルティング会社だったが、後半は九州大学ビジネススクールの教授だった。

九大のビジネススクールは、1学年定員45名の小さなビジネススクールで、欧米のビジネススクールの学生が20歳台後半であるのに対して、QBSの学生は30歳台が中心で、40歳台、50歳台の人たちもかなりいる。日本では、ビジネススクールを出ても、突然給料が上がったり投資銀行やコンサルティング会社に転職したりすることはない。ただ、10年～20年働いた後に、ビジネススクールに来ると皆学部時代にはそうでもなかったのにいつの間にか勉強が大好きになっているのである。社会人楽しく勉強をしてもらうために、中央経済社から「企業財務」向けの『コーポレートファイナンス』や「企業価値創造とM&A」向けの『事業ポートフォリオの最適化』

といった教科書を出版した。九大に来る前は東洋経済新報社から『連結財務戦略』という本を1冊出版しただけだったが、九大にいる間に上記2冊の教科書に加えて、東洋経済新報社から『日本の財務再構築』、創成社から『M&Aアドバイザーの秘密』『東北アジアの真実』、同文館から『ネットの政府』と6冊の本を出版した。研究としては毎年日本の国民経済計算統計から貸借対照表、損益計算書、キャッシュフローを作成してこれを分析し、事業会社、金融機関、一般政府、家計の4セクター別に10兆円以上の問題点と解決の選択肢について検討した。『日本の財務再構築』と『ネットの政府』はこれをまとめたものである。途中から日本だけでなくアメリカの国民経済計算統計も分析対象に加えた。

ビジネススクールでは教育、研究以外の国際交流や、社会貢献も大事である。QBSではアジアに提携校を絞り、中国に10校、アジアに6校の提携校を作った。九大にもともとあった大学間協定に加えて、大連で東北財経大学、大連理工大学、瀋陽で東北大学、台湾で政治大学と部局間協定を結んだ。国際交流としては、交換留学、海外視察、教員交流の3本立てで交流を行った。はじめに1年間自分のビジネススクールで基礎を勉強し、2年目の前半に交換留学にでかけて、2年目の後半に自分のビジネススクールで卒業することにした。中国では秋から年度が始まるので、彼らにとって2年の前期はQBSにとって後期であるため後期に英語科目を集めた。学生を連れて海外視察は、遼寧省の大連、瀋陽、上海、南京、杭州、武漢に加えて香港やタイのバンコクに行った。教員交流は毎年提携校にお願いして1年間「アジアビジネス戦略」を後期に担当してもらうことにした。

社会貢献プロジェクトとして最も力を入れたのが、短期エグゼクティブ・プログラムである。これは私がQBSの1回目の専攻長を務めた2010年にはじめたもので、九州の40歳～50歳台の経営幹部を16～18人くらい集めて4カ月にわたって日曜日ごとにQBSの主要科目を提供する研修である。QBSの初期は、TOTOやコカ・コーラウエストといった単独企業向けに研修を行っていたのだが、民間企業経営には波がある。好調な時は人材育成に力を入れるが、問題が出てきたときに始めに調整対象になるのは外部に委託する人材育成プロジェクトであることが多い。2010年に短期エグゼクティブ・プログラムを始めたのは、多くの企業から幹部を派遣してもらうことによって、研修プログラムが断絶することを防ぐとともに、より多くの企業にQBSの研修プログラムを提供しようという意図であった。2020年にコロナに襲われて対面だけでなく遠隔対応が必要になったが何とか乗り切って2023年度で14回目になる。短期エグゼクティブ・プログラム内では、アジア視察を行い、遼寧省の大連、瀋陽、上海、杭州、武漢、台北、バンコクなどを視察してきた2020～22年度は、コロナで海外に行けなくなり、国内視察に切り替えた。国内は国内で糸島のよかまち未来プロジェクト、ドコモのVRビジネス、九大の水素・二酸化炭素削減研究、佐賀のIT企業オプティム、三菱重工長崎、洋上風力人材育成の長崎オーシャンアカデミーなど面白いものがたくさんあった。個人プロジェクトは最終日に発表を行うが、参加者が経営幹部であるために、期間は短いがMBAよりも実現性が高くなるようだ。

他に社会貢献として取り組んだものとして福岡の自治体支援がある。はじめは久留米市で行政改革委員会の委員やガス事業民営化の委員をしていた。その後糸島市で行政改革委員長を糸島市ができてから今年度に至るまで務めている。筑紫野市でも総合計画策定審議会会長及び財務アドバイザーを3回務めた。筑紫野市では策定した総合計画の施策を部長、基本事業を課長に配分して、市が責任をもって総合計画を実行する仕組みを作った。これまで自治体の総合計画は、作るだけで誰も実行する責任を持たないのが当たり前だったので、筑紫野市の仕組みは日本の自治体の中でも先進的なものだと自負しており、糸島市や大野城市でも同様の制度を導入した。大野城市でもここ数年公共サービス改革委員長を務めており、外部評価対象を予算で決める事務事業から総合計画の最下位に来る小施策に変更した。

2024年3月末でQBSは定年退職だが、2025年4月からは新設ZEN大学の教員を75歳まで勤める予定だ。ZEN大学というのは、カドカワグループが持つ角川ドワンゴ学園がはじめたN校の大学版である。N校は7年前に1学年1500人で始めて23年には高校生2万5千人と日本最大の高校に育った。ZEN大学の1年目定員は5千人だが、北海道から九州・沖縄まで自宅にいて大学生になり大学を卒業できるという極めてユニークな大学だ。角川ドワンゴ学園の理事長は元文部科学次官で、日本財団と提携しており、2023年11月に出した設立申請は2024年8月頃に認可される可能性が高い。九大退職からZEN大の開学まで空いている一年の間に企業のお手伝いをする話もでてきた。65歳になり忘れっぽくはなっているが、なんとか75歳まで東京と福岡を往復しながら頑張るつもりだ。

## 21年間を振り返って



経済学研究院教授  
星野 裕志氏  
専門分野：国際ロジスティクス  
国際経営

2003年4月に九州大学ビジネススクール（QBS）の設立に関わらせていただいて以来、21年間経済学研究院と学内のユヌス&椎木ソーシャル・ビジネス研究センターに所属しながら、自分でも想像もしなかった様々な活動の機会を与えていただきました。21年間の研究活動の中から私の専門分野であるロジスティクスと国際経営に関わる活動を2つ、この機会に紹介させていただきます。

1つは東日本大震災です。2011年3月11日の当日は、QBSの学生のグループを引率して、シンガポールにいました。訪問先のシンガポール港湾局で映像を見て、阪神淡路大震災で被災した経験がありながらも、津波の脅威と被害に信じられない思いでした。帰国するとNHKから連絡があり、被災地にどのように救援物資を届けるべきかの解説を要請され、震災から11日目に「クローズアップ現代」に出演し「被災地に届け 緊急支援物資」のテーマで30分にわたって考えを話したところ、その番組を偶然に見られた国交省政務官兼政府現地災害対策本部次長から、番組直後にNHKに連絡があり、今の先生の説明されたことそのものを東北で実施していただけないか

とのメッセージが届きました。

2011年は1年間米国コロンビア大学にサバティカル（研究休暇）で行くことになっていたものの、出発を遅らせることにして、東北に赴くことになりました。寝袋とヘルメットを抱えて、名古屋まで飛行機で、そこから長距離バスで仙台に入りました。

まずは被災地各地を歩いて状況の確認に努めました。石巻市では、被災者には発災から1か月間、おにぎりやパン、ミネラルウォーター、少量のお菓子などしか配給されておらず、生鮮品はキャベツなどがわずかに3回、温かい食事はただの一度も提供されていないことがわかりました。それは当時国内外から送られてきた20万5千カートンもの救援物資が、仙台市内の24ヶ所の物流倉庫に保管されながらも、道路、鉄道、港湾といった物流のインフラストラクチャーが壊滅的な被害を受けていたことと、被災地の情報が適切に把握されていなかったために、被災者に届けられていないことが判明しました。避難所の情報やニーズはメディアなどの報道で発信されるものの、在宅の被災者の情報は誰にも把握されていなかったからです。余震の続く中でしたが、現地ではピアリングを続けました。

次に陸上自衛隊、各中央官庁からの派遣者、地元自治体関係者、市民活動のグループに一同に現地対策本部に集まっていたいただき、それぞれの強みを活かしながら、中央官庁が調達を担当し、自治体が最新の情報を提供、集積地までは自衛隊の車両で輸送し、被災者には地元の市民グループが届けるというシステムを構築しました。いわゆるハブ&スポークシステムの応用による配送システムに、食事や救援物資を載せる方法です。幸いに関係者のみなさんの熱意とご協力で、石巻市では8日目から温かい食事を被災者に届けることが始まり、この方法を東日本大震災の被災地に次々と拡大していきました。莫大な数の救援物資を各戸ごとにパッケージ化をして、配布も始めました。

滞在がほぼ1か月になりゴールデンウィークが過ぎ、政府の対策本部の置かれていた宮城県庁に通勤するみなさんの服装が、作業服から通常の洋服に変わり始めた頃、私の任務も一段落したと判断し、福岡に戻りました。

日本は毎年のように台風被害だけではなく、地震、津波、洪水、噴火などあらゆる自然災害があるにも関わらず、それらの災害対応の経験が十分に蓄積されていないことを残念に思います。米国のFEMA（連邦緊急事態管理庁）のように、対応能力と即応

性に優れた専門機関が必要のように思います。

2つめの活動はベトナムです。昨年日越外交関係樹立50周年を迎えましたが、ベトナムと九州は、特別に緊密な関係にあることをご存知の方は多いかもしれません。福岡県とハノイ市は友好提携（姉妹都市）の関係にあり、東京の大使館と大阪の総領事館に次いで、福岡にはベトナム総領事館が設置されています。2008年に九州電力の鎌田会長を發起人に九州ベトナム友好協会が設立され、総領事館の誘致活動、博多座でのベトナム・マンスの開催や、文化や経済交流などが展開されました。今では多くの九州の企業がベトナムに進出し、福岡県においてベトナム人が在留外国人の中でトップになっています。QBS3期生で当時ベトナム航空の営業部長をされていた河原繁憲さん（現在中村学園大学准教授）は、この取り組みの立役者の1人です。

私自身は設立当初から顧問として協会の活動に参加し、2016年からベトナムのハイフォンにあるベトナム国立商船大学で国際経営の集中講義を毎年行いながら、ベトナムと九州の関係強化に努めてまいりましたが、昨年2月九州ベトナム友好協会の会長に就任することになりました。就任の翌月には、九州経済連合会 麻生名誉会長、九州経済産業局 苗村局長と共に経済交流ミッションとしてハノイを訪問し、政府機関や各省政府代表と会談させていただきました。また、大変光栄なことに、昨年11月29日には、外交関係樹立の式典に東京を訪問された帰りのヴォー・ヴァン・トゥオン主席と、福岡で会談の機会をいただきました。国家主席との会談の中で、主席が20代のころに宮崎県の実家にホームステイのご経験があり、九州に対してとても親近感を感じていらっしゃることを、そしてベトナム人の九州での受け入れ、人の交流、九州とベトナムの投資や貿易などの経済交流の促進の3つの要望を出されました。これに対して、まさに友好協会の目指している方向と同期していることから、力強く実現のお約束をさせていただきました。九州とベトナムの間は、既に太いパイプで結ばれており、さらに文化も経済もより緊密化することを楽しみにしています。

ここでは、21年間の活動の中から二つをご紹介しますでしたが、自分の専門分野について、学内での教育と研究はもちろんのこととして、少しでも社会に還元できたとすれば嬉しく思います。

3月末をもって退職いたしますが、これからは日本の抱える課題に対して、少しでも改善に繋がるようなプロジェクトに取り組んでまいります。最後に



なりますが、在任中にお世話になったすべてのみなさまに、心から感謝申し上げます。

## お別れのことは



経済学研究院教授  
**内田 交謹**氏  
専門分野：企業金融

2008年度より16年間教鞭をとらせて頂き、本年3月に退職いたしました。私は学生としても学部・修士・博士の9年間お世話になりましたので、九大経済にちょうど四半世紀お世話になったこととなります。幼少の頃は祖父母が六本松に住んでおり、よく当時の教養部キャンパスを通り抜けて遊びに行っていました。また兄も経済工学科の卒業生で、私が中学生の頃から九大の話をよく聞いていました。そのような時間まで含めると、九大には、本当に長きにわたって縁があったように思います。この間、私と関りを持って頂いたすべての皆様にお礼申し上げます。たいへんお世話になりました。

学生時代の思い出として、九大経済では「聞く力」と「自分の頭で考える力」を養うことができたと思っています。当時の授業内容はとても難解で、また板書をあまりされない先生が多かったので、授業を理解するには、先生のお話を集中して聞く必要があったように思います。いつしか、授業では単語を記憶しようとするのではなく、話の背後にある考え方やロジックを理解しようとする癖ができました。また大学院のある授業で、先生が教科書に関する話を突然おやめになり、「君たちはそもそも〇〇論と××論の違いはどのように考えているのか」という大所高所からの質問をされたことがありました。教科書の公式の理解と計算に集中している学生には到底考えの及ばない質問ですが、私がそれまで何となく考えていたことを自分なりに一生懸命説明したところ、先生は全く表情を変えずに「これは君が10年かけて考えるべき課題だ」とだけ言われました。この課題の解答は私自身今でも分からない（先生からも教えて頂けなかった）のですが、答えのある問題を解くだけでは不十分で、答えのない問題を日々考えることの重要性を叩き込まれた経験として、今でも強烈な記憶として残っています。

九大経済で培った「聞く力」と「自分の頭で考え

る力」は、研究者・教育者としての私の大きな財産となっています。経済学の研究では、単なる事実の発見ではなく、事実の背後にある見えないメカニズムをストーリー化して証明することが求められます。このストーリー化の作業において、学生時代にさまざまな考え方・ロジックに触れたこと、自分の頭で考える癖が付いたことが大きく生かされています。教育においても、学生の様子を見ながら何が欠けているかを想像し、少しでも教育効果が高まる工夫を考えていく作業に有効でした。実際のところ失敗も多くありましたが、16年かけて九大における私なりの教育スタイルがほぼ確立できたと自負しています。

16年前に前任校から移籍した最大の動機は、自分の研究を直接教育に生かす仕事をしたいという思いでした。私が着任して数年後に大学院国際プログラムが開設されたこともあり、非常に多様な学生に研究指導する機会に恵まれました。私が思いも寄らなかったアイデアに触れ、まったく知らなかった制度を知ることで、一人では絶対不可能だった研究成果を数多くあげることができました。研究指導は思っていた以上に大変な仕事でしたが、自分の時間とエネルギーの大半を捧げたいと思える仕事に出会えたのは本当に幸せなことでしたし、学生との議論を通じて新しいアイデアや発見にたどり着き、その背後にある経済メカニズムを考察することは、何にも代えがたい楽しい作業でした。大学院生には高いレベルの研究成果を要求し、厳しく接することも多かったのですが、共著論文が学術誌からの掲載許可を得て学生と喜び合うという瞬間を何度も経験でき、この仕事に就いて本当によかったと思っています。国際プログラムでの授業を通じて英語のスキルも上がり、また若い学部生のビジュアルなプレゼンを真似することで、国際的な研究発信能力を高めることもできました。

九大経済では本当に充実した時間を送らせて頂きました。教員の裁量が大きく、各自のスタイルを尊重する先生方のおかげで自由に仕事をさせて頂きましたし、国立大学法人がさまざまな課題を抱える中、学部・学府のスムーズな運営に貢献されている先生方、正規の授業時間以外にも多くの大学院生を指導されている先生方、そして国際プログラムで英語教育に貢献されている先生方には、本当に頭が下がる思いです。私の指導を信じてついてきてくれる学生にも恵まれ、他では絶対に経験できなかった仕事に携わることができました。ただ、同じ仕事で長期間モチベーションを保つのが苦手な性格で、最近はず

分ができる工夫はほぼやり尽くしたという感覚に陥るようになりました。また13名の主指導学生が博士号を取得し、学生の研究を指導したいという欲求も完全燃焼できたと感じています。自分のキャリアにおける残された時間を考えた際に、自分の知識や経験をこれまでとは違う方向で生かしたいという思いが強くなり、他大学への移籍を決断しました。これまで九大経済では卒業式・修了式を三度経験しているのですが、いずれも、その時々で九大を卒

業するという感覚を持つことができませんでした。ですが今回は、25年かけてようやく九大経済から卒業許可を頂いたという思いでいます。新しい職場では、間違いなく失敗を多く経験すると思いますが、学生・教員として九大経済で培った知識を生かして、自分なりに工夫しながら少しずつ改善していく時間を楽しみたいと考えています。

九大経済のますますのご発展をお祈りしています。みなさま、本当にありがとうございました。

**経済学部同窓会 創立50周年記念寄付金**

寄付者様ご芳名(卒年・五十音順・敬称略)

ご寄付いただいた方々のお名前と卒年を、匿名希望の方を除き掲載させていただきます。心より感謝申し上げます。

名 前	卒年
九経三七会同窓会	
大西 俊郎	現職員
河野 哲夫	
村田 安民	S26
牛房 良嗣	S30
綱脇 俊夫	S30
富澤 義敬	S30
平田 一男	S30
稲富 實	S33
岡本 尚	S34
平田 憲一	S35
山田 勉	S35
荒木 一彦	S36
野田 淳嗣	S37
八尋 紀一	S37
曾根崎 和夫	S38
外村 保宏	S38
林(梅本)健二	S39
宮川 清	S39
堀内 隆治	S40/42
美山 英治	S40
福富 信一	S43
神殿 正二郎	S44

名 前	卒年
下川 正人	S45
鶴川 洋	S45
眞子 政光	S45
小森田 憲繁	S46
高崎 映三	S46
灰測 英昭	S46
藤田(今坂)和子	S46
藤原 香太郎	S47
中尾 伸雄	S47
南里 一夫	S47
橋本 純夫	S47
久留 和夫	S47
植木 正二	S48
廣崎 政臣	S48
安田 茂	S48
幾度 恭典	S50
木元 正	S50
須藤 則行	S50
中野 光男	S50
廣田 憲治	S50
宮川 祐治	S51
長 宜也	S52
清田 康之	S52

名 前	卒年
後藤 敬治	S52
養父(山本)規幸	S52
櫻井 文夫	S52
原田 和郎	S52
安楽 孝	S53
江口 康司	S53
森 拓二郎	S53
嶋田 正明	S54
石橋 直樹	S55
杉田 浩二	S56
内丸 琢也	S57
下畠 英治	S57
中原 滋	S59
松本 洋志	S59
山口 秀次	S60
福岡 尚治	S62
野村 明広	S63
平井 琢二	S63

名 前	卒年
藤井 和成	S63
小坂 武久	H元
田川 真司	H2
永原 聖也	H2
石橋 万里子	H7
山崎 浩	H7
潮崎 智美	現職員
平山 浩一郎	H8
平野 大輔	H11
井ノ口 喜章	H14
宮城 勇人	H14
吉田 彰子	H16
河野 雄介	H27
下田 聡一郎	R3
前泊 朝日	R4
稲田 侑真	4年生
島 貴哉	2年生

令和6年3月末現在

**寄付金額 934,000円** 寄付者数 95名  
 累計:寄付金額 5,070,000円・寄付者365名  
 (目標額 1,000万円 令和8年3月末まで)

## 九州大学経済学部同窓会歴代会長

- 初代 田中 定氏 (昭和50年10月4日～)(3期8年)  
 第2代 森下 弘氏 (昭和58年2月4日～)(1期3年)  
 第3代 岡野 正實氏 (昭和61年10月24日～)(2期6年)  
 第4代 谷川 大介氏 (平成4年10月9日～)(1期1年)  
 第5代 渡邊 彦士氏 (平成5年7月7日～)(1期3年)  
 第6代 福岡 道生氏 (平成8年10月11日～)(1期3年)  
 第7代 吉田 清治氏 (平成12年2月10日～)(1期2年)  
 第8代 森山 靖章氏 (平成14年5月31日～)(1期3年)  
 第9代 平山 良明氏 (平成17年7月7日～)(1期3年)  
 第10代 池田 弘一氏 (平成20年7月7日～)(2期6年)  
 第11代 貫 正義氏 (平成26年7月7日～)(3期9年)  
 第12代 道永 幸典氏 (令和5年7月7日～)

## 同窓会からのお願い

同窓会会費の納入をお願い致します。

会費は、終身会費(45,000円)と普通会費(3年間分4,500円)になっております。

終身会費は一括払いと分割払いとがあります。ご都合のつくときにご協力よろしくお願い致します。

- |       |      |                             |
|-------|------|-----------------------------|
| ①終身会費 | 一括   | 45,000円                     |
| ②     | 〃    | 3分割 15,000円×3回(1.5年間で納入完了)  |
| ③     | 〃    | 6分割 7,500円×6回(3年間で納入完了)     |
| ④普通会費 | 3年間分 | 4,500円ずつ(11回・49,500円の納入で完了) |

◎平成18年(2006年)3月末日までに旧同窓会規定の終身会費を既に納入頂いております皆様は、そのまま新同窓会規約の終身会員に移行しております。

◎従来の普通会員として今まで振り込まれた合計金額と、49,500円との差額を、今後何回かの分割払い、または一括払いで払い込まれた場合も、終身会員に移行となります。

◎終身会費を分割払いにされます方は、半年毎に3回又は6回続けてお振り込み頂きますようお願い致します。

◎会費納入や住所変更等のデータは、令和6年3月31日現在で集計しました。

住所など身の事情に変更がございましたら、すみやかに下記同窓会事務局までご連絡ください。



九州大学経済学部同窓会事務局 (開室：平日 10時～17時)

〒819-0395 福岡市西区元岡744 九州大学経済学部内

TEL 092-802-5561 / FAX 092-802-5560 / E-mail : dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp

経済学部同窓会ホームページ <http://koyukai.kyushu-u.ac.jp/alumni/4>

経済学部同窓会の財政は変わらず厳しい状況です。  
是非共、ご寄付、協賛広告のご協力をお願い申し上げます。  
お申し込み、お問い合わせは、上記事務局までご連絡ください。